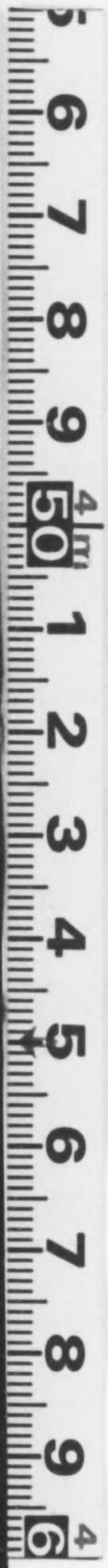


332
387



始



人工 10-63

鳥飛名走銀

石川半山善

332
385



自序

我れ郷里を出ててより江湖に放浪するもの、于茲二十餘年、東奔西走、席暖かなるに違あらず、北馬南船、身の安ずべき所を知らず、いろくの境遇を經過して、其の間には面白いことも有ツたが、苦しきことも有ツた、才子佳人にも逢へば、英雄豪傑にも會し、見聞する所も少くはなかつたが、頭を回らせば、總べて是れ茫として夢の如しだ、乃ち想ひ起すに隨て記し、記するに隨て雜誌「道」に掲けたる者十八

1.11.28.

自序

自序
 篇、今更らに二篇を添え、校訂刪正を加へ、題して
 鳥飛兔走録と云ふ、嗚呼、蒼天浩渺たり、象王の嘯
 呻、我れ敢て企て及ぶと謂はんや、矧んや、獅子の
 哮吼をや、畢竟是れ無味の談のみ。

下澁谷の僑居に於て

半山識

壬子の秋

鳥飛兔走録

目次

(一)	福澤先生の教訓……………	一頁
(二)	フルベツキ先生のピストル……………	一
(三)	福地櫻痴居士の琵琶……………	二〇
(四)	西郷従道侯の「成程」……………	三〇
(五)	大隈、伊藤、井上三元老の會話……………	三九
(六)	田中正造君と星亨君……………	五一
(七)	松村介石君の章魚演説……………	六三
(八)	副島伯と伊藤侯……………	七三
(九)	高島嘉右衛門君の道と理……………	八二

目次

(十)	下田歌子女史の演説	九二
(十一)	大迫將軍と函館	一〇三
(十二)	三宅雪嶺君の韓皇謁見	一一二
(十三)	ナイト夫人の祈禱	一二二
(十四)	君ケ代の合唱(高平大使と埴原書記官)	一三〇
(十五)	逆境に陥れるレヅ井ツト夫人	一四二
(十六)	タフト君の宣言	一八四
(十七)	一條公爵夫人と經子姫	一九四
(十八)	埃及に於て伊藤博邦君の活劇	二〇二
(十九)	三島彌太郎君と江藤新作君	二三八
(二十)	端方君の嚴命	二四九

鳥飛兔走録

石川半山著

第一 福澤先生の教訓

今から二十年ばかり前、或る土曜日の午後、我輩は三田の福澤論吉先生を訪問して、時事新報社へ入れて下さいと懇願した事が有つた。先生は詳かに我輩の志望を聞き取られたる後、先生成程、それでは君の學問は、所謂經學を主としたのだな、我輩左様で御座います、ソレ故に家道の衰へたのを回復すること、を以て、私が第一の目的として居りますので、治國平天下は修身齊家の後にと志して居りますのです。

福澤先生の教訓

先生「フーム、兎に角月曜日の朝、九時から十時迄の間に、交詢社へ來なさい。」

我輩は辭して愛宕町の下宿屋へ歸つた、早速同宿の角田浩々歌客(現東京日々新聞記者)の室へ往くと、折柄前間恭作(前韓國統監府書記官)が來て居た、角田も前間も我輩と同じく慶應義塾の出身だから、福澤先生の事は能く知て居るので、我輩が此の先生との談話を詳かに報告すると、前間曰く

前間「ソレは非常に有望だ、先生が若し見込が無いなら、直ぐにイケないと言はれるが、月曜日に交詢社へ來いと云はれた以上は、最早や及第したと見て良い、何しろ祝すべしだ、

角田「ソウだ、何か奢れ、我輩も兩人の保證に依て、之は入社を許された者と思ふた、ソコへ

運塚麗水(其頃は報知新聞の小説記者)が來たので、早速牛肉を買ふて四人で大に前祝ひをやつた、翌日曜日の朝、我輩は考えた、愈々出來た者には相違ないが、成るべく良い地位へ登用されるには、自分の力量を先生に知らせる必要が有る、ソレには一本手紙を書いて先生を感服させてやるべしと、それから大に文章を練つて、巻紙の二間半も費やして、細かい字で長い手紙を書いた、其の文意に曰く
先生は一代の巨人であるが、先生の門下から出でたる人物は、多く平々凡々たる者で、其の氣魄精神一代を傾倒し、能く先生の後進たるに耻ぢざる者は、甚だ稀れで有る、生や慶應義塾に學び、將來先生の門下たるに耻ぢざる所の一代の大人物となる積りで有ります

文意はコウで有るが、其の文章は漢文調を用ひ、對句を撰み、抑揚

あり頓挫あり照應ありと云ふ風に、苦心を極め、特に諸所に韓退之の文句を引いて、大豪傑は必ず先達之士天下の望を負ふ者が、之を引き上げ、又後進の士天下の望を負ふ者が、其の後を承けて、其の業を成すと云つた様なことを書いて、先生が自分を引き上げて下されば、自分は屹度先生の門下たるに恥ぢない大人物になると云ふ覺悟を書き、それへ其頃關係して居た庚寅新誌を添えて、此の雜誌に在る生の文を見て下さいと言つてやつた、實は我輩の考按では、此の一文を以て大に先生を感動せしむる積りで有つた所が、事は全く志と違ひ、此の一文の爲めに、悉く先生の感情を害して、サツパリ失敗に歸して仕舞ふた

一週間數十回の訪問

約束の如く月曜日の朝、九時に交詢社へ往くと、先生は未だ来て居られない、九時三十分には往くと、先生の馬車が有つた、早速刺を通すると、先生は今は用事が有るから面會は出来ないとケンもホロ、其の挨拶だ、ハテこふしたワケではないがと思ふたが仕方がない、其の午後に三田の私邸を訪問すると、未だ歸て居られない、時事新報社に往くと、既に歸られたと云ふ、再び三田へ往つたが、先生は何れへか廻はられたと見えて、歸て居られない、夜に入つて三たび三田を訪問すると、依然として冷淡で唯今來客中だから又お出でなさいと云ふ取次だ、是に於て我輩は頗る失望したが、又窻かに考えた、昔熊澤蕃山は中江藤樹の門へ寢込んで、三日三晩、其の願意が聞届けられる迄、飲まず食はずに待つたことが有る、青年苟くも一事を成さんと欲するには、此の熱心なかる可らず、先生既に一たび我れ

を款待したので有るから、逢はないのは逢へない事情が有るので有らう、よし左らば先生の面會する迄、幾度でも足を運ぶべしと決心し、それから火曜日の朝から、毎日三田と交詢社と時事新報社と苟くも先生の居る所へは、ドシ／＼押しかけた、名刺を一枚づゝ置いては歸り、歸ては往き、朝往て晝往て晩に往て夜又往く、時事新報の受附が、後にはモウ取次がなくなつたが、それでも往つた、三田の先生の私邸でも、取次が又來たかと云ふ顔附きで出て來る、三日も四日も續けたが、先生は中々面會しない、かくて一週間續けると、次ぎの土曜日の午後、遂に面會を得た

先生の大喝を喰ふ

若し先生が面會しないならば、面會する迄は幾日でも幾百回でも出

かけてやらうと思ふて、土曜日の午後も面會謝絶をアテにして出かけ、三田の私邸の玄關へ案内を請ふと、不思議にも「お通り下さい」と來た、其時に至ても尙先生の感情を害して居ることに氣が附かず、多分先生が自分の熱心の程度を試験して居るので有らう位に思ふて居たのだ
 坐に通りに暫らく待て居ると、先生の咳拂ひの聲が聞えた、バタ／＼と云ふ荒らい足音が聞えると、先生は右の手に煙草盆を提げて出て來られた、我輩を見るとイキナリ大喝を浴びせられた
 先生「毎日／＼ソウ無暗に訪問されては、家内の者も迷惑する、何の用事でソんなに毎日來るのか
 我輩「月曜日に交詢社へ來いと云ふ先生のお話で……………」
 言ひ切らぬに、先生は再び大喝し

先生「時事新報社では君の様な男は入らない、エースかノウカを直ちに言へ」と云ふ催促なら、ノウと云ふばかりだ
 それでは話は分て居る、最早や先生に用事は無いのだから、我輩は辭して歸らうとすると、先生は煙管に煙草を附けながら「マア待ちなさい、人生はソんな者じやないよ」と言はれて、我輩は其の意味を領會し兼ねて、モチ／＼して居ると、先生は煙草を一服吸ふて、灰吹きを叩きながら
 先生「全體お前達は韓退之などを崇拜するのが間違ひだ、韓退之は私は大嫌ひだ、法螺を吹て人をオドかそうと云ふ不都合なやり方だ、人に物を頼むに法螺を吹くことは禁物だ、福澤は法螺は聞き飽いて居る、モウ耳に瘤が出来て居る
 先生は左の手を以て、左の耳のタブを引きながら、「耳に瘤が出来て

居る」とくり返へされた

先生人間は自分の志は、餘り人に吹聴する者ではない、遠大な志が有つたら、之れはジツと胸中に秘して置いて、之を實行するに務めるが良い、己れは將來エライ者になる積りだと云ふ様な事を公言するのは、大馬鹿のする事だ、ソんな奴は決してエラくなならない、ソんなことを公言するのをイムボルタントと思ふて居るのは大間違ひだ

煙草を又一服吸ふて、ボカリ／＼と灰吹きを叩かれた、我輩は其の見幕に驚て、身を小さくして居たが、是に至て一言を返へした
 我輩「先生、實は私がアノ手紙をさし上げましたのは、私の文章をお目にかけてます積りで御座いましたので、文章に書きますと、自然に文字が仰山になりましたので……」

先生ナニ文章を見せる積りで……アンな文章は駄目だ、文章は自分の意を通ずる様に書く者だ、無暗に六ヶしい字を使ふて、人に分らない文を書くのは、今日の弊だ、田舎の村長の制札を見なさい、自分の學問を銜ふが爲めに、人民に分らない様に……と書くではないか、お前のも其の流儀だ、モット能く勉強しなさい、ホントウの學問をしなさい

言ひ捨て、煙草盆を提げながら、サツサと奥へ這入て仕舞はれた、我輩は俯向きながら、先生の大きな足の裏の向へバタリ……と往くのを見たばかりで、暫らくは茫然として其の座を立ち得なかつた

第二 フルベツキ先生のピストル

明治二十七年から八年へかけて、我輩は信州松本の丸茂と云ふ旅館に下宿して居た、其の頃の古るい日記帳を出して見ると、二十八年の四月二十五日の朝有名なるフルベツキ先生の來訪に接したことを記して居る、

下婢飯島様が入らツしやいました、外にお兩人御一所に入らツしやいました、お一人はヒヨロ……と脊の高い異人さんで御座います

松本教會の牧師飯島彌太郎君は其頃我輩と往來して居たので、旅館の下婢が知て居た、ヒヨロ……と脊の高い異人さんは即ちフルベツキ先生で、外に一人の同行者は横濱の老牧師稻垣信君で有つた

我輩「此の室は取り亂して居るが、二階の一番は明いて居るか
下婢「明いて居ります

我輩「それではアレへお通し申して置いて呉れ

今日では鐵道も開通して松本市の情勢も、定めて一變して居る事と思ふが、其の頃此の丸茂と云ふは市内第一の旅館で、館名を枕流館と稱し、松本市を貫流せる女鳥羽川の流れに沿ふて立てる、随分立派な旅館で有つた、特に此の二階の一番室と云ふのは小松宮殿下が赤十字社大會へ御臨場の折柄御休憩所にも充てられた位で、眺望の至て良い室で有つたが、然かしながら純粹の日本流の建築で有つたから、フルベツキ先生の如き長身の人は、腰を屈しなくては其の室に出入することが出来なかつた

下婢「アノ異人さんは馬鹿に脊の高いお方で、頭が鴨居へ支へまし

たから、腰を屈めてコンなにしてお這入りになりました、オホ……
來客を二階へ案内して歸つて來た下婢は、フルベツキ先生が腰を屈して室へ這入れられた風の可笑しさを身振りをしながら語つて、腹を抱へて笑ふた、其の頃は山と山との間に開かれたる此の松本平に於ては西洋人が未だ頗る珍しくして、其の一舉一動が人の注意を惹いた者で有る

春風駘蕩たる先生

新日本の恩人として世に隠くれもない先生の事だから、其の芳名は夙に承はつて居たが、御目にかゝるは此時が初めてで有つた、如何にも温和な、親しみ易い、春風駘蕩たる人で有つたから、我輩も十分に胸臆を披いて語つたが、先生は其の長い兩足を疊の上に投げ出

し、床柱にモタれながら、日本語で色々な話をされた

フル「アナタ、年齢何歳有りますか

飯島君にも我輩にも此の間ひを發して其の年齢の尙少壯なるを知るや、先生は微笑を含み

フル「私、日本の年、アナタより多く有ります

成程、先生は維新前の渡來者中でも、最も早やい方の人で有るから、明治維新の前後に生れたる日本人は、其年齢に於て先生が日本に於て取りたる年よりも少ないのである

フル「私初めて、日本へ來る時、亞非利加喜望峯を廻はり、印度洋から來ました、航海日數半年かゝりました

先生は其の當時の航海の如何に不便で有ったかを語り、本來和蘭人で亞米利加へ歸化し、更らに日本へ傳道に來た經歷上の面白い話が

有った

佛國宣教師の忠告

先生は最初一度日本へ來てから歐洲へ歸つた時に、佛國の宣教師が彼れの日本傳道に反對したことを語り出し、當時の日本が如何に歐洲人の目に映じて居たかを説かれた

フル「佛蘭西で一人の友達申します、忠告あります、日本傳道止める宜しい、再び往く無用あります、私、問ひました、ナゼですか、友達面白い事申しました

先生は前に置かれたる日本茶を飲み、咽喉をウルほしたる後、満面に微笑を湛え

フル「日本人野蠻有ります、頭の上御覽なさい、ヒストル有ります、

此のピストル神様を撃つピストル、基督を撃つピストル、外国人毛唐人みなみな撃つ有ります、之れ攘夷家の旗章有ります、此のピストル、日本人の頭の上^{うへ}に在^ある間は、傳道駄目有ります、成功しない、止める宜しい、其の上^{うへ}に一身危険有ります、日本往^ゆく殺される、何にもならない、モット外^{ほか}に良い働き有る、私^{わたし}友達^{ともだち}コウ申しました

我輩^{われら}成程^{なるほど}、維新前^{いしんまへ}のチヨム鬨^{まげ}をピストルと見たのは面白いです、フルソウです、それで私^{わたし}之^{これ}に答^{こた}へて申しました、私^{わたし}日本往^ゆく、其のピストル、頭^{あたま}から取り下^{くだ}ろす、傳道^{でんどう}屹度^{きつど}成功^{せいこう}有ります、アネ

タ私^{わたし}の成功^{せいこう}祈^{いの}る宜^{よろ}しい、日本^{にほん}人の爲^{ため}め祈^{いの}る宜^{よろ}しい……先生^{せんせい}は尙^{なほ}詳^{まづ}かば當時^{たうじ}日本^{にほん}人の攘夷^{じやうゐ}的精神^{せいしん}が如何^{いか}に猛烈^{もうりゃう}にして、其^{その}のチヨム鬨^{まげ}を攘夷^{じやうゐ}思想^{しゆきう}の標章^{へうしやう}と見たる佛國^{ぶつこく}宣教師^{せんけし}の必^{かなら}ずしも無理^{むり}なら

ざりしを語りたる後、

フル今^{いま}の大隈^{おほい}さん、伊藤^{いとう}さん、皆昔^{みなむかし}はチヨム鬨^{まげ}有りました、頭^{あたま}の上^{うへ}ピストル有りました、攘夷^{じやうゐ}黨^{どう}有りました、私^{わたし}長崎^{ながさき}で逢^あいました、未^まだ若^{わか}かい時^{とき}です、それからだんく、外國^{ぐわいこく}の事^{こと}分^{わか}つた、チヨン鬨^{まげ}切りました、ピストル無^なくなりしました、今日^{こんにち}此^{こゝ}の田舎^{いなか}へ來^きても、ピストル見^みない、日本^{にほん}人^{じん}神様^{かみさま}の道信^{みちしん}する人多^{ひとほ}くなりしました、アハアハアハ

先生^{せんせい}は諄々^{じゆんじゆん}として語^{かた}つて此^{こゝ}に至^{いた}るや、大きな口^{くち}を開^あいて快^{こころ}よく笑^{わら}はれた、さながら其^{その}の最初^{さいしよ}の宣言^{せんげん}の成功^{せいこう}を祝福^{しゆくふく}するが如^{ごと}くに笑^{わら}はれた、平和^{へいわ}なる先生^{せんせい}の顔^{かほ}は満足^{まんぞく}の光明^{くわうめう}を以^{もつ}て輝^{かがや}いて居^ゐた

ハイカラ語の由來

我輩がハイカラと云ふ言葉を書き始めた爲めに、今日では大變に世間に行はれて居るが、此のハイカラと云ふ言葉を書いたのは、全く此のフルベツキ先生の話のビストルに對照させる爲めで有つた、即ち東京毎日新聞に掲げたる當世人物評中に、「山縣、鳥尾、谷などは保守主義の武斷派、攘夷黨の日本黨、頑冥不靈なるチヨム鬚黨、ビストル黨で有るが、大隈、伊藤、西園寺等は進歩主義の文治派で、開國黨の歐化黨、胸襟闊達なるハイカラ黨、ネクタイ黨、コスメチツク黨で有る」と書いたのが起因で、外のチヨム鬚黨、ビストル黨、コスメチツク黨、ネクタイ黨などは少しも流行しなかつたが、唯此のハイカラと云ふ一語だけが、馬鹿に大流行を來した、今日では最早や我輩が發明したと云ふ事を知らずに用ひて居る者も多く、一の重要な日本語となつて仕舞ふたが、然るに實は我輩が此のハイカ

ラと云ふことを書いた起因を申すと、全く此の時のフルベツキ先生の話を胸中に蓄えて居て、それを五六年の後に至て新聞の上には現はした結果で有る。



第三 福地櫻痴居士の琵琶

明治二十九年の秋、大岡育造君が團子坂の別邸の紅葉を見せると云て、客をしたことが有つた。床の正面に座を構えたのが櫻痴居士福地源一郎先生で、先生の右方は益田孝君から高梨哲四郎君、左方は大倉喜八郎君、馬越恭平君、益田克徳君と云ふ順序で席が定まつた。所謂紳士紳商の宴會で有て、藝者は何れも吉原から第一流の藝の出来るのを撰んで有つた、唯一人花子とか云ふ若い美しい女が来て居たが、其の外は何れも藝と意氣とを賣るので、容姿の見るべき者は居なかつた。

取り出した琵琶

やがて酒三行の頃、少しも酒を飲まない櫻痴居士は立ち上がった、座敷の真ん中へ座を構え、ソリソリ其の携へたる風呂敷包みを解き始めた、何事ならんと見て居ると、取り出したのは御自慢の琵琶で有る、馬越君はニヤ／＼笑いながら

馬越先生、モウお始めてゴスか

福地「早やく始めないと、アトが支へるからね、櫻川町さんの前ですが、今日は「木曾の最期」と云ふのを一段……」

先生其の「木曾最期」と云ふ文をワザ／＼印刷にした者を持って来て居て、藝者共をして之を客の前に配附せしめた、菊版四號活字で八ページばかりの印刷物で有る

福地「此の木曾の最期は平家物語卷の九の第五章で、壽永三年正月の二十二日、木曾義仲粟津ヶ原に於て討死の事を書いた者でゴス、

私の琵琶は面白くなくても此の文章だけは立派な者だ、皆さん讀んで御覽じろ、それは面白い者だから……
其の印刷物の一部を手にとつた益田孝君、之を開きながら感服した様な顔をして

益田ナルほど、コウして印刷して戴いたのを持って拜聴して居ると、能く分つて良うガスな

福地「イヤ御殿山さん、只お聞きになるよりも之を見て居らっしゃると、未だ御辛抱が出来ますかと思つてね

大倉君が不意に頭の天邊から出した様な甲高な聲を發し

大倉「イヤ之れは御趣向でゴした

福地先生は此の褒め言葉をキツかけに琵琶を取て、ポロンくと調子を合はせ始めめた、益田克徳君は低聲で我輩に囁やいた

克徳「福地も此の癖がないと餘ッ程良い男だが、困まつた者だよ

我輩「此の印刷物迄ワザく作て御持參とは熱心ですね

克徳「先づ馬鹿だね

克徳君は一言にコウ言つて、ハツハツハと輕るく笑ひ出した

いよく始まる

忽ちにして櫻痴居士の唸るが如く訴ふるが如き聲が聞えた

福地「木曾は信濃を立ちしとき、巴、山吹とて二人の美女を具せら

れたりイ……

ポロンくと眠ひくなる様な歌だ、高梨哲四郎君は其の白い大きな綺麗な顔に微笑を含んで居たが、右手を以て其の額を撫で廻はしながら、其の前に座して居た年取つた藝者に向ひ

高梨「美女と来たね、二人の美女と……」

女「ズブ濡れですね」

高梨「ウフ、……」

女「オホ、……」

傍聴席にかゝることありとは神ならぬ身の櫻癡先生知る由もなく、

前額より烟を出して熱心に語る

福地「木曾殿、其の日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧きて、五枚兜の緒を締め、狂者造の太刀を佩き、廿四差したる石打の箭の、其日の軍に射て少々残つたるを頭高に負なし、滋藤の弓持て、聽ゆる木曾の鬼草毛と云ふ馬に、金覆輪の鞍を置て乗り玉ひたりけるが、鎧踏ばり立上り、大音聲を揚げて、日來は聞けんものを木曾冠者、いまは見るらん左馬頭兼伊豫守旭將軍源義仲ぞや、

ポロン〜

櫻癡先生少しく成田屋張りに、聲をフーワリと張り上げて、首を左右に振て、一生懸命に語つて此に至るや、大向の大倉君が聲を掛た

大倉「イヨ！大きい〜」

藝者共が之に和してヨ〜と空々しく褒めた、褒められた櫻癡先生、益々調子に乗て語り出したが、何しろ陰氣を以て本領とする琵琶歌を先生の氷へない聲でポロン〜と和して語るが上に、其の節廻はしが時々危ぶなく脱線に及ばんとするので、面白くないこと夥しく、既に語て六ペーヂに及んだ頃には、聴衆悉く勞れて耳を傾くべくもあらず、流石に同情に富める大倉君さへもモウ褒めなくなつた

福地「頃は正月二十一日、入相ばかんの事なれば、薄氷は張つたり

けり、深田ありとも知らずして、馬を颯と打入れたれば馬の頭も見えざりけり、ポロン〜

高梨「ア、未だ済まないのか、困まつた者だね、馬の頭も見えないと言て居るが、マルで當人夢中の體だね

藝者「およしなさいよ、聞えますよ

福地「あをれども〜打てども〜働かず、ポロン〜

高梨「逆いな、チツとも働かない

藝者「オホ、、、

高梨「アハ、、、

かくて居士が熱心に語りて「拵てこそ粟津の軍は破れにけれ」迄には謹聴の席は破れて小聲の冷評奇語百出し、居士が全く語り了りて一禮した時には、何れもホツと一息吐いてヤレ〜と拍手喝采した

十六年の昔の事

之れから大倉君の一中節、馬越君の端歌など出で、遂に主人大岡硯

海先生が五助の糸で、得意の陣屋を語つたが、能く肥えた益田克徳

君が洋服姿で、胸に金鎖を光らせながら、大岡君の熊谷に配して、

「里往つたら様子が知れようか、五里來たら便りがあるか」と首を

振つて、秀調張りの相模の聲色をやつた様子の可笑しかつたことは、

今想ひ出しても吹き出さずには居られない、然し之れもハヤ「十六

年は一ト昔」の事だ、櫻痴居士も克徳君も彼の花子と言つた美人も、

既に黄泉の客となり、大岡君の鬢髪も最早や大分白くなつた、想ふ

に高梨君の奇麗な光澤ある顔にも今では大分皺の出來た事で有らう

洒々落落の人物

福地櫻痴居士は明治の一名物で、文章も上手なり演説も巧みなり。相對して話をして居たらイツ迄も人を飽かせず、才學識見誠に一代に超越したる人物で有つたが、唯其の琵琶だけは随分人を悩ませた者だ、或は曰く「琵琶だけでは無い、金の事では随分友人に心配をかけた者だ、アレほどの才子が道樂に身を持ち崩した爲めに借金で首が廻らず、末路は悲惨な者で有つた、青年宜しく之を殷鑑として戒しめなくてはならぬ」と、真に其の通りだ。此の一點に至ては我輩と雖も居士を辯護することは出来ないが、然しながら其の胸襟は洒々落落誠に垢抜けのした面白い人で有つた、唯其の琵琶に至ては此の一代の通人に似合はない野暮な物で、先生が宴席でポロン／＼を始め

た日には誰れも彼れも悩まされざるを得なかつた者だ



第四 西郷従道侯の「成程」

西郷従道侯が世間から「成程侯爵」と云ふ異名を取り、英字新聞の紙上に於ても、「Marquis Indeel」と題して、侯爵の事を書いたことが有るが、實を申すと、此の異名は、かく申す我輩が奉呈した者で、之を奉呈するに至つた次第は、侯爵の成程に一杯喰された話が有るか

黒岡艦長の書面

明治三十年の夏、我輩が布哇から歸朝する時、當時ホノルル府に碇泊中の帝國軍艦浪速號の艦長黒岡帶刀君から、種々の委託を受けたる中に、時の海軍大臣たる西郷侯爵に宛てたる一封の書面が有つた、

黒岡君は薩藩の門閥家で、侯爵とは姻戚の間で有つたから、此の書面は果して公けの報告で有つたか、或は單に私信で有つたか、それは知らないが、兎に角彼れは之を我輩に托する時に曰く

黒岡「此の書面を侯爵に届けて下さい、それから尙親しく侯爵に面會して、當地の事情を詳細に話して下さい」
コウ云ふ話で有つたから、歸朝後間もなく侯爵を其の官邸に訪問した

叮嚀なる御挨拶

極めて平和なる容貌に加ふに、極めて鄭重なる應對振り、侯爵の特色で有るが、此の時は又格別に叮嚀で有つた

侯爵「此度は御苦勞でゴアンした、別にお勞れもゴアはんか
 かく挨拶ありたる後、我輩を前の椅子へかけさせ
 侯爵「黒岡艦長の手紙を見ました、委細はアナタから伺ふ様にとの
 事で有いますが、一體アチラはドンな様子でゴアンすか
 一國の大臣が一介の青書生に向て、此の如き鄭重なる御挨拶には、
 誠に恐縮せざるを得ない、されば恐縮する事は恐縮したが、然かし
 ながら海軍大臣から此の如く禮を厚ふし辭を低ふして質問せられた
 ので、我輩も聊か得意となつて、詳かに布哇の情勢を語つた

ハゝアとナアル程

移民事件の起りたる原因から、布哇政府の外交政略、國務卿ブレ
 ン以來の米國の對布方針、布哇共和政府の大統領及び内閣員の人物

我駐布公使の之に對する態度、軍艦派遣の結果、布哇に在る米國軍
 艦の事から、浪速艦渡布以後の情勢等を凡そ二時間ばかりも説明し
 た、此間侯爵は終始謹慎なる態度で、極めて眞面目に「ハゝア」と
 「ナアル程」とをチャムボンに發せられ、如何にも感服したるが如き
 顔附きをせられたので、我輩も覺えず知らず、其の思ふ所知れる所
 を残らず吐いて仕舞ふた

侯爵「ナアル程、それでコチラの軍艦が参りました時、亞米利加の
 評判はドンなでゴアンしたか
 我輩「左様で御座います、私は亞米利加へ渡りませんでしたから、
 能くは分りませぬけれど、米國新聞に依て之を見ましても、又布
 哇に居ります外國人の話に依りましても、今にも日米戦争が始ま
 る様に誤解して、米國西海岸の各都市は大騒ぎを致した様で御座

います
尙我輩は歸途、歐米漫遊より歸れる徳富蘇峯氏及び新に我國に赴任したる米國公使バツク氏と同船し、此等の人に依て聞き得たる米國の情勢をも説いた

パール港の質問

我輩の言葉の切れた時、侯爵は不意に思ひ出した様な顔附きをして侯爵布哇にはパール港と云ふ港が有りましたがアナタは御覽になりましたか
我輩「ハイ視察を致しました
侯爵「ハ、ア、ドンな港でゴアンスか
我輩は其の視察したる所を詳かに語つた、市街の設計から水深地勢

等をも残る所なく説明した

最後の挨拶

侯爵は相變らず、成程々々を繰り返えされて居たが、愈々我輩が説明を終つた時に、「ナール程」と最も感服した如き態度で言はれ、それから片頬に微笑を含まれて
侯爵「唯今御話の次第は、是迄士官共の報告と大抵大差は有イませぬ、ワタイも注意して居ましたので、大體お話が能く分つて、難有ふゴアンスした

此の御挨拶には流石の我輩も、一本參つた、ハ、アナアル程と感服されて居るから、我輩の説明は侯爵の耳に新らしく響ける者とのみ思ひ込み、調子に乗て長廣舌を揮ふたが、「大差が有イませぬ」と云

ふのでは、何も蚊も既に御存知の事で有ったのだ

油斷のならぬ「成程」

其の後伊藤公爵に會した時、談偶々西郷侯爵の事に及び、我輩は此の話をすると、公爵は大笑せられ、「イヤ西郷の成程には、時々一杯喰はされるから、決して油斷はならぬ」と言はれた、考えて見ると侯爵が「成程々々」と言はれるのは、決して相手の話を感服して居られるのではない、全く相手を甘まい調子に乗せて、其の胸臆を悉く吐かしめる手段に過ぎない、恰かも義太夫語りの三味線引きが、ハアとかヤアとか聲をかけるが如き者で、語る者をして語るに易からしむる方便に過ぎない

廣大なる勢力

然かしながら又考えて見ると、此の西郷侯爵の「成程」は非常なる勢力で有った、平和なる容貌、謹慎なる態度、叮嚀なる應對振りで、「ハ、ア成程」と人の話を謹聴する所に、無限の味ひが有った、何人も彼れには反對する事は出来なかつた、圓轉滑脱、殆んど捕捉す可らざる一種の人格で有った、彼れの「成程」は或る意味に於て、大隈、伊藤諸元勳の大雄辯に優る力を持つて居た、我輩が此の話を「東京經濟雜誌」の紙上に公けにして以來、西郷侯爵は「成程侯爵」と云ふ異名になつたが、目を閉ぢて想一想すれば、海軍大臣の一室に、大きなテーブルの彼方に、大きな顔に、太い筋の、意味ある笑顔で、太い濁つた低い聲で、「ハ、アナル程」と言つた侯爵の面貌が、今

以てアリく、と目に映じて来る



第五 大隈伊藤井上三元老の會話

明治三十年の夏の事だ、伊藤博文侯が英女皇ヅ井クトリアのジュビ
リイ祝典へ参列して歸朝するのを迎へる爲めに、一横濱迄出かけた
とがある、郵船會社の支店へ往て見ると、其の樓上に一代の名士が
雲の如くに集まつて居た

内閣攻撃の氣焰

井上馨伯今の侯爵を中心として桂太郎、伊東巳代治、末松謙澄の諸
君が、時の松隈内閣の政治を攻撃して居る所は最も注意を惹いた、
特に巳代治男今の子爵が最も鋭とい舌鋒を揮て、皮肉な批評をして
居たが、其の傍らに遞信大臣野村靖子が大きな目をバチクリさして

之を聽いて居たのは、頗る奇觀で有つた、芳川顯正子と兒玉準一郎君はソンの事には少しも頓着せず、熱心に將基を戦はして居たが、多くの人は此の兩雄の決戦を見物して居た

大隈伯爵來る

伊藤侯爵を載せたる加那太メールのエムブレス、オフ、インデア號は、既に觀音崎を廻はつたので、程なく着港するで有らうが、然かし出迎への小蒸汽船を發する迄には尙二三分は有るだらうとの話を聞いて、我輩は其の間に一寸所用を達して來ようと思つた、歸て見ると何ぞ圖らん、船は既に到着して出迎へし小蒸汽船は諸名士を載せて出發した迹で有る、これは失敗つた、ドウしようかと考へて居る所へ、下から階子段を昇つて來る者が有る、見ると左右から人が助けて居る、ハ、アさては大隈伯爵が來られたに相違ないと見て居ると、果してソウで有つた、其の後から遞信次官鈴木大亮君がやつて來た

威權赫々たる大臣

大隈伯爵は當時外務大臣と農商務大臣の兩椅子を其の隻脚に踏んまえて、其の勢力は大した者で有つたが、伯爵の座が定まるや郵船會社員は鞠躬如として其の前に進み
社員皆様は先刻本船へお出でになりました
大隈小蒸汽はモウ發したか
社員ハイ、先刻で御座いました
大隈ア、そうか

伯爵は如何にも鷹揚なる態度で

大隈伊藤を載せた小蒸汽が本船を離れたら知らせて呉れ、此の裏の棧橋の所迄出迎へるから

社員「それでは此の裏の棧橋迄御出でになりますか

大隈「そうだ

社員「ハッ畏りました

郵船會社の社員が彼方へ去ると、伯爵は鈴木遞信次官や我輩共を相手に横濱の昔話を始め、其の變遷の大なることを語て居る内に郵船の社員が來た

社員「唯今小蒸汽が本船を離れました

大隈「そうか、それでは一寸裏迄出よう

伯爵は隨員に助けられて裏の海岸へ出でた、鈴木次官外二三名、我

輩共も其の後に從ふて海岸へ出でた、小さい棧橋の此方に立て、屹度海の方を睨んだ伯爵の威風は實に堂々たる者で有った

鍋島君先づ來る

小蒸汽船は着いた、第一に棧橋へ飛び上がつて來たのは、伊藤侯隨員の一人なる鍋島桂次郎君で有った、何の氣もなく棧橋を歩んで來て、不圖外務大臣がソコに立て居るのを見るや、驚いた様な顔をして一禮したばかりで、直ぐに横の方へ退くと、大隈伯爵はウムと頷を少しく動かしたばかりで、顔面の一線だにも動かさず、固より一言をも發しない、次で誰れやら一人來たが之れ亦伯爵の前に平身低頭したばかりで、急いで横へ避けて走しつた、大臣の威風も此の時代には未だなか／＼大した者で有つた

三老の對面

第三に棧橋へ現はれたのは誰れ有らう、伊藤侯爵其人で有った、派手な脊廣服に黒の山高帽、肩から胸へ小さな革囊をブラ下げて、飄然として棧橋へ下りて來たが、此方に大隈伯爵の立て居るのを見るや、忽ち滿面に微笑を含んで急いで歩み寄つた

伊藤「ヤア、これは有難ふ

大隈伯爵は初めて笑ひを含み

大隈「先づ御機嫌よう……………」

西洋ならば握手もすべき所だが、唯帽子を取て挨拶をして居る、其の伊藤侯爵の背後からシルク、ハットにフロツクコートの井上伯爵が聲をかけた

井上「ヤア大隈か

大隈「ヤア、君は北海道へ往つて居たと聞いて居たが何時歸つたのか

井上「伊藤が歸る者だから、急いで歸つて來たが、君は今日は大磯から來たのか

大隈「ソツだ、大磯から來たのだ、之れから又大磯へ歸るのだ

後から來た人々は、棧橋の上に立往生をして、三老の話の終るのを待つて居る

井上「マア二階へ往つてゆつくり話さう

伊藤「それが良からう

伊藤侯爵を中央に左方には大隈伯爵、右方に井上伯爵、三人相並んで先頭に立ち、大隈伯爵は杖を自ら突いてヒョクリ〜と歩むが、伊藤井上の兩元勳も之と歩調を合はせて、ゆるり〜と歩み、其の以下

の面々は野村、芳川、桂、末松、伊東、何れも遙かに離れてゾロ／＼と其の後から二階へ往った

三老の會話

二階の一室の大きなテーブルの一端に、伊藤侯爵がドツカと座を構え、其の右方には大隈伯爵、左方には井上伯爵、それから左右の一二脚の椅子には誰れも遠慮して腰をかけない、何れも引き下がって三老の對話振りを見て居る

大隈海上は別に荒れもしなかつたか

伊藤イヤ格別の事もなかつた、幸ひに健康は此の通りに良いが、

君も相變らず元氣の様だね

大隈お蔭で足も痛まず、大きに達者だ

井上お互ひに年は取ても未だ達者だが、陸奥は氣の毒で有った

大隈ソウだツたね

伊藤侯爵の方に向ひ

大隈君は未だ陸奥の訃を知らないだらう

伊藤今日此所へ着いてから聞いて、實に残念に思ふて居る所だ

かゝる打ち解けた話にも怠りなき注意を拂ふて居ると見えて、三老に最も近い椅子に座せる桂子と巳代治男の眼光は最も異様の輝を持つて居た、同じ内閣大臣でも野村子の前では無遠慮に内閣攻撃をやつたが、さすがに大隈伯の前では一言をも發しない、其の内に郵船會社員が来て大隈伯に向ひ

社員大磯へお歸りになりませすれば唯今お時刻で御座います

大隈そうか、それでは今日はお先へ御無禮する

大隈伯爵は一同へ輕るく會釋をして去ツたが、其の後で、又一トしきり巳代治男が内閣攻撃談をやツた

品川驛には高島將軍

やがて時間が來て横濱から乗込んだ貸切列車には二室有て狭まい一室には伊藤侯、井上伯、野村子、桂子、及び巳代治男の五人のみで、芳川子末松男以下の諸君は悉く次の比較的に廣い一室に居たが、其の間の戸が開いて有るので、上の室に於て巳代治男が談論風生の情態が能く分かつた、桂子も亦相應に相槌を打て居た、井上伯は伊藤侯に向ひ

井上伊藤、コレの話は嘘じやない、實際だと保證して居た、獨り此の間に立て野村子は何とも言はずに居たが、

汽車が品川へ着いた時に、ブラットフォームには一個の英雄らしき風采の男が出迎へて居た、之れぞ當代の一大怪物たる陸軍大臣高島鞆之助將軍で有ツた

高島子對桂子

嗚呼、今考へて見ると全く夢の様に思はれる、此時内閣は既に薩派と進歩黨と相容れざる者となり、薩派の大立者たる高島將軍は政黨員の横暴を伊藤侯に訴へて其の同情を得んとして居たので有る、然かしながら伊藤侯爵は固より薩派の人ではない、特に松隈内閣組織の當時、臺灣總督たる桂子を召喚して陸軍大臣となさんとし、高島將軍が之に反對して桂子の未だ歸京せざるの前、逸早く陸軍大臣たることを發表して、一代の耻辱を與へたる爲め、殆んど仇敵の思ひ

を以て内閣の破壊運動に着手せる桂太郎子が伊藤侯爵の側に在る以上は、如何に疎腕なる高島將軍も得て伊藤侯爵を其の藥籠中の物とする事は出来なかつたのだ、伊東巳代治男は此頃からして既に桂大將の政治上の總顧問で有つた、徐ろに近世の政治史を考へて見るなら、伊藤侯爵歸朝出迎の一ト幕にも、其の間に幾多の興味を發見すること有らうと思ふ

第六 田中正造君と星亨君

ツイ年月日は忘れた、調べて見たら分かるで有らうが、何でも山縣内閣の時で有る、第十三議會か十四議會の間で、一代の怪傑星亨君が日本の政治を、其の一手に受け負ふて、最も派手やかに活動をして居た時の事だ

重野君負傷の報告

或る日の午後衆議院の新聞記者席へ往て見た、開會の劈頭、議長片岡健吉君は人の耳を傾くべき特別の事實を報告した、曰く議長先刻議員重野謙次郎君は當院の控室に於て暴漢の爲めに殴打せられました爲めに、議席に列することが出来なくなりました

自黨の利害を一身の利害の如くに引き受けて活動して居る憲政黨の
院内總理星亨君は、自黨の重野君が負傷したと聞て、直ちに問ひを
起した

星「傷は如何ですか

議長「輕傷です

星君は更らに問ふた

星「暴漢はドウしました

議長「直ちに就縛しました

星「何者ですか

議長「ソレは取調中で未だ分りません

起立して居た星君は、其の腰を下ろすの前、憲政本黨員の議席をデ
ロリと一睨したる後

星「多分反對黨の壯士でしよう

獨語するが如く言ひ放て、其の肥大なる體軀をドサリと議席へ下ろ
した

田中正造君の怒號

星君が獨語の如き此の言を聞くや否や、さながら猛虎の吼ゆるが如
き叫聲は、議場の一角から起つた

星「議長、反對黨とは何れの黨派を指して言つたのでガスか、伺ひ

たい

見ると怒氣満面の田中正造君が立居る、彼れは議員を打つが如き
無頼の壯士を、憲政本黨員なるが如くに誣ひたる星君の言を怒つた
ので有る、然るに議長は彼れの發言を顧みず、平然として議事を進

行せんとした

議長「之れより議事日程に入ります

田中君は大に怒つた

田中「議長、本員は星君に質問がある、議長、議長、質問がある、

質問がある、議長、議長……」

田中君は議長を連呼したが、議長は平然として取り合はないので、

彼れは議長の許可を待たず、其の破鐘の如き聲を發して怒鳴り出し

た

田中「反對黨とは何たるタワ言だ、無禮だ、無禮な事だ、ドノ黨派

を指して言ふか、暴漢が反對黨とは何の事だ、星君の答辯を望む

だ、答へねエか、答へられねエか、反對黨とは何だ

彼れは其の議席に立ち上がつて、星君の議席を睨み附けて、怒鳴ッ

て居るが、星君は自若としてドコを風が吹くかと云ふ顔附きで、天
床を嘯ふいて居る

妨害の聲「無用々々、無用——」

田中君の怒號を打ち消すべく、憲政黨の雜輩が聲を合せて、無用々

々と叫けんだが、之れは偶ま以て彼れを激せしむるに過ぎなかつた

田中「無用でねエぞ、黙まれエ、反對黨とは何を指して言ふか、星

君は答辯を打たねエか

田中君には見向きもやらず、星君は其の議席から冷然として叫んだ

星「議長、速かに議事を進行されんことを望む

田中「何だ、議事進行だ、べらぼう臭せエ、此の事が片附かねエ内

は、議事進行に反對だ、サア答辯しろ

片岡議長は儼然たる命令を下した

議長「田中君、發言を許しません」

田中「ナニ、發言を許さねエ、ソんな無法な事が有るか、反對黨とは何だてエので、星君の答辯を求めろのだ」

議長「田中君、議長は發言を許しません、お控えなさい」

お控えなさいと言ッたッて、それで控える様な田中君ではない、益々吼り出して、議長が何と制しても聴かないのみならず、憤然として議席を蹴て、演壇に飛び上がった、満堂はドツなる事かと手に汗を握て居ると、彼れは手を戟の如く舉げて、演壇を叩きながら、星君をハタと睨み附け

田中「暴漢が反對黨とは、何を以て言ッたか、明白に答へろ」

スルと星君がスイツと立ち上がった、さては愈々答へるのかと思ふと、豈圖らんやだ

星「議長に注意します、議事の妨害をなす所の田中君には、宜しく退場を命ぜられたい」

之を聞くと壇上の田中君は、烈火の如く怒ッた

田中「ナニ退場だ、無禮な事を……己れが答へるべき者を答へね

エで、此の野郎、何だ

手を揮り、足を踏み鳴らして怒鳴ッて居る、退場々々と云ふ聲は、憲政黨員から連呼された、中には「議長何をグズグズして居られるか」などと云ふ者さへも出でた、是に於て議長も止むを得ず

議長「田中君、退場を命じます」

田中「何だ反對黨とは……」

田中君は尙怒鳴ッて居るので、議長は再び嚴命を下した

議長「田中君に退場を命じます」

退場を命ずると云ふ聲を聞くと、彼れは振り向きながら

田中「何だ、退場を命ずる、退場しねエ

彼れは今度は議長に向て喰てかゝつた

田中「退場しねエ、飽迄も退場しねエだ、ソんな無法なことは聞か

ねエ

阿修羅王の如く荒れ廻はり、間断なく怒鳴つて居るので、議長は遂に守衛に命じて、田中君を場外へ出さしめんとしたが、大兵にして大力ある彼れは、一人や二人の守衛の力でビクともしない、三人四人五人、終に六人の守衛が力を合せて、手を取り足を取り、田中君を擔ぎ出さうとした、彼れは躍起となつて之れと争ひ、無禮だ、無法だと叫び続けに叫げんだ、遂に片岡議長の右腕を捕へて離さない、かくて暫らくの間はモミ合ふたが、流石に六人の守衛が力を合

せた事だから、漸く之を擔いで場外へ出した

蟹甲將軍の緊急動議

大活劇を演じたる田中君が場外へ擔ぎ出されて、満堂がホツと息を吐いたる刹那に、場の一隅から

蟹議長、議長、緊急動議が御座います

能く氷へた聲が凛々として四隅に反響した、誰れかと思ふて見ると之れぞ院内の一名物、蟹甲將軍井上角五郎君で有る、議長の許可を得て演壇へ駆け上るや否や、其の爽快なる辯説を揮ふて、田中君を懲罰委員に附するの動議を提出した

井上「唯今本員が諸君にお謀り致すは、田中正造君を懲罰委員に附するの動議で有ります

憲政黨から大喝采が起つた、彼れは滔々と其の理由の有る所を演説した

井上抑も本院の議長席は議場の秩序を保持する神聖なる一席で、何人も之を犯すべからざる者で有ります、然るに唯今田中君は諸君が目撃せられたる如く、議長が退場の命令に反抗したるのみならず、此の神聖なる議長の腕及び肩に手を懸けました、此の一事たるや誠に許すべからざる事と思ひます
彼れの雄辯を以て蔽ふ可らざる事實を取て押さへた辯論だから、憲政本黨の院内總理鳩山和夫君も殆んど之を破碎すべき手段を見出し得ず、此の緊急動議は討論を用ひずして決せられ、田中君は終に懲罰委員に附せらるゝ事となつた

活劇後の兩君

議場の波瀾漸く収まり、日程が平凡なる法案に移るや否や、我輩は傍聴席を去て廊下に出でた、偶ま向ふから田中君がノソリとやツて來た

我輩面白い活劇を演じましたな
挨拶をすると、彼れは議場で怒つて居た時とは打て變はつた、佛の如きニコニコ顔で

田中「ヤア、どうもハア、何とも早やワハ……………」
右手で頭を押さへながら大口を開て哄笑した、尾崎行雄君などが議場で怒つた時は、廊下へ出ても尙餘憤を存し、假りにコウ云ふ場合に逢へば「多數黨の壓制には困ります」位を言て、ツーンと氣取

る方だが、田中君に至ては怒氣が一番經過して仕舞ふと、最早や癪がなくなつて、満面和平でワハ……と來るのだ、それから星君はドシな顔附きをして居るかと思ふて、憲政黨の控室へ往て見ると、彼れは多くの黨員を相手に、相變らず傲然たる風で立て居る

我輩今日の田中の活劇は大分面白かつた

と言つたら、星君は鋭どい眼光を一閃して、我輩の言を打ち消すが如く

星、彼れは氣狂ひだ

敵はドコ迄も敵の扱ひにして一步を許さない意氣が此の一語に現はれた、太い強い筋が彼れの小鼻の側から引かれて、兩頬の下へ楕圓形に描かれ、眞一文字に閉ぢたる口と相對して、剛愎不屈の人相は天晴れ大政黨の大親分なりと感ぜしめた

第七 松村介石君の章魚演説

今から凡そ十年前の事だ、明治三十三年の冬、我輩は毎日新聞の經營上、何か新しい計畫を立てたいと思ふて、種々に考へた末、毎日新聞演説會と云ふ者を設くる事にした、何しろ社長は日本一の雄辯家たる島田三郎君で有り、我輩も亦其頃各所の公會に招かれて演説をなし、尙社中には木下尙江と云ふ天稟の雄辯家を筆頭として、無名の英雄が居たから、之れに加ふるに社友の一名か二名を依頼すれば、少くも聴衆の千名位を引くべき、立派な演説會が出来ると考へた、ソコで我輩は此の計畫を島田君に謀り、且つ曰く、

福澤先生は演説は三田の演説館に限り、文章は時事新報と著書の外には書かれない、故に先生の演説を聴かんと欲する者は、皆三

田に赴き、先生の文章を読まんと欲する者は、時事新報と著書の購讀者となるのです。されば貴君も亦此の例に倣ひ演説は議會の外には、毎日新聞演説會に限り、文章は著書の外には、毎日新聞に限ることにして戴きたい。島田君は我輩の意を諒して、「成るべくソウ云ふことにしましよ」と言はれたので、いよ／＼三十四年の一月から、毎月一回神田美土代町の青年會館に於て、之を開催することに決し、其の第一回の演説會には、社友の中からは松村介石君に願ふ事となつた。

千餘名の聴衆

一月十六日の午後六時開會と云ふ振れ出しにしたが聴衆は五時頃から詰めかけて、定刻には早や満員の盛況で有つた。社中からは島田

君と我輩の外に、木下尙江と岩佐運平が出席したが、此夜聴衆の元氣は頗る旺盛で、岩佐は演説中に少からぬ冷評を受け、木下の如きも其頃は未だ十分に世に知られて居ないので、盛なる罵倒と戦ふた。

無準備の松村君

松村君は元來一人か二人の辯士で、静かな聴衆を前に置いて、シンミリと一二時間講演することを好む方で有る、千餘人の雑駁な、荒らッばい聴衆を相手として、辯士も四五名、入り代り立ち換りやると云ふ演説會は、寧ろ好まれない方で有つたから、登壇の前に、我輩の肩を叩いて

松村「今日は一寸お茶を濁して置くよ、僕等はコンな騒がしい演説會には適しない」

今夜の大立者の一人に、お茶を濁さされては困まるから、ソッなことを言はずに、十分に願ふと我輩が依頼すると、手を掉りながら松村別に準備はして来て居ないよ、それにコウ騒がしくては、僕には聲が續かない
 白のハンケチで頸を巻いた上を右手の指先で指して
 「今夜あたりは、島田君の様な聲でなくては駄目だ」と言ッた

人間の價値

かゝる内にいよゝ松村君の番が来て、我輩が之を聴衆に紹介すると、松村君萬歳の聲が起ッた、黒紋附の羽織に、仙台平の袴で、肩を聳やかして、威勢の良い演説が始マッタから、聴衆は大に喜んだ
 が、我輩は之を聴いて居ると、如何にも其の講演に身が無い、所謂ラムネ演説だ、沸騰力が強いばかりで、サツパリ味ふべき所がない、さては愈々何の準備もなく、宣言通りに一寸お茶を濁さされるのか、之れは困マッタことだと思ふて居ると、松村君は壇上で叫び出した

松村「凡そ人間の價値は、頭を上げて直立して、闊歩するに在る
 聴衆「ヒヤ〜」

松村「頭を天に朝して、大手を振ッて、地球面上を闊歩することが、人間の尊とい所だ、是れ人が萬物の靈長たる所以で有る、諸君、考へて見玉へ、總べての動物は、皆頭を地に垂れて、四ツン這ひに這ふて居るではないか
 辯士が兩手を卓上に垂れたるゼスチユアの可笑しさを見て、聴衆は

大に笑ひ出した

松村「人間にして初めて頭を持ち上げて、ズーンとソリ返へツて、大股を擴げて濶歩することが出来る、之れが即ち人間特有の權能で、人間の尊むべき價値は此處にある
松村君は壇上に昂然として、人間の價値を示すべく其の頭を天に朝すると、聴衆は其の勇ましき風采を視て、手を拍て大喝采をした

忽ち起る一個の質問

松村君が大喝意で、此の大喝采を受取て居る瞬間、會場の一隅から能く冴へた高い聲で
聲「章魚は如何

と云ふ質問が發せられた、會場は一時にシーンとなツた、之を聴い

た松村君は、覺えず右手を以て、頭を押さへた

松村「ナール程、章魚は頭を天に朝して居る……………」
聴衆はワーツと笑い出した、松村君は少しく俯向きながら

松村「之れは確かに一本參ツた

聴衆は再び笑ふた、先刻から窺かに無準備を危ふんで居た我輩は、之を見てハツと思ふた、松村君が暗礁に乗り上げたかと思ふて、覺えず手に汗を握て居ると、彼れは悠然たる態度で、徐ろに垂れたる頭を持ち上げながら

松村「然かし、諸君、章魚には骨が無いぞ

殆んど天來の福音とも謂ふべき一語に、千餘の聴衆は、狂喜して大喝采をした、かくて難關を切り抜けたる彼れは、其の勢ひに乗じて、大説教を聴衆の頭上へ浴びせかけた

松村如何に頭を天に朝して居ても、骨の無い、章魚入道では仕方がない、足が八本有て、諸方へカラみ附いて居るのは、恰かも骨の無い藩閥の子弟が、其の藩閥の先輩共にカラみ附いて居る様な者だ、誠に醜態で有る、人間には骨がなくてはならぬ、骨が有て頭を天に朝し、昂々として獨立獨歩でなくてはならぬ、彼れのカスれたる聲は、一種の威嚴を帯びて來た、それ迄荒らかりし千餘の聴衆は、さながら電氣に打たれたるが如く、一時に靜肅になつた、壇上の彼れの態度は全く一變し、諄々として獨立獨歩の教へを説き始めた、リンコルンや西郷南州を初めとして東西の英雄豪傑は、其の例に引かれ、和漢洋の格言は口を銜て出で、最初には全く無準備のラムネ演説なるが如くに見えたる彼れの演説は、遂に得易からざる一代の名演説となつた、而して此夜最後に演壇に立ちた

る島田君の演説は、例に依て明快、満場を酔はしめたりと雖も、其の聴衆を感動せしめたる力に至ては、遠く松村君の章魚演説に及ばなかつた

成田屋張りの腹藝

我輩は之れより以後、松村君の演説を聴くこと幾十回なるを知らないが、然も未だ曾て此の位に聴衆を感動せしめた者を聴いたことがない、演説をやつた人には、能く分かるで有らうが、コウ云ふ場合に、突然「章魚は如何」と一本參らされて、咄嗟の間に「然かし、章魚には骨が無いぞ」と出て來るは、精神に十分の餘裕が無くては出來ない事だ、平生十分に精神を修練して居る人物でなくては、容易に出來ない事

だ、若しも此の場合に骨が無いと云ふ、活きたる答が出て來なかつたならば、松村君が如何に雄辯を揮ふた所が、最早や聴衆は之を謹聴しなかつたで有らう、其の演説は全然失敗に歸して仕舞ふたで有らうと思ふ

毎日新聞演説會は之れより十回を續け、此の年の冬島田君が盛に鑛毒演説を始めた爲めに、終に此會も亦所謂「鑛毒の犠牲」となつて中絶したが、此の十回打ち續き、多數の雄辯家が演説したる幾多の演説中、我輩が今尙忘れるこの出來ないのは、此の章魚演説で有る、

「一本參ツた」と右手で押さへた頭を、再び持ち上げながら、極めて落着き拂ふたる態度で、「然かし、章魚には骨が無いぞ」と言ツた時のウマさと云ふ者は、芝居道で言ふなら、全く成田屋張りの腹藝で、實に大きな者で有ツた

第八 副島伯と伊藤侯

初めて日英同盟が成立して、到る所其の評判で持ち切つて居た明治三十五年の三月、東邦協會の例會は、此月十四日の午後五時から、華族會館に於て開かれた、來賓は新に歐州から歸朝したる伊藤公爵（其頃は侯爵）と云ふ振れ出しに、來會者は平常よりも多く、我輩が二階の大廣間に入つた時は、既に彼所に一團、此所に一團と思ひく、に集まつて居たが、見渡した所、伊藤系の人少なくて、アンチ伊藤派の人が多かつた

甲、伊藤は露國へ往て、ウヰツテと日露同盟をやりかけて居たと云ふではないか
乙「ソウだ、日露同盟の相談中へ、小村から日英同盟の成立を

打電した者だから、大狼狽でペテルボルクを引揚げて倫敦へ往つたさうだ

丙 大失態だねエ

伊藤嫌ひの面々の座せる一卓子には、コウ云ふ談話に花が咲いて居る、山田、莫南、鈴木、萬次郎、福本、日南などと云ふ豪傑連を中心として、伊藤攻撃の火の手は、大分高かつた、「全體遼東半島還附の怨をも報ひない今日、日露同盟などは怪しからぬ話だ」と意氣捲くもあれば、又「林董が日英同盟を纏めたことを聞くや否や、直ちに踵を旋らして、倫敦へかけ付け、同盟條約に對して、種々の干渉を試み、今回歸朝しては、日英同盟を自分がやつた様な顔附きをするとは、都合な次第で有る」と嘲罵する者も有つた。

伊藤出で来る

かゝる所へ上手の入口から、ゾロ／＼と這入て来た者が有る、見ると眞つ先きに白髪白髯の會頭副島種臣伯が、紋附羽織に袴を着し、鶴の如き厳格な歩調で出て来ると、其の次にフロックコートの大勳位伊藤博文侯が、傲然としてソリ身になつて現はれた、其の後から加藤高明、近藤廉平、其他の面々が出て来た。長いテーブルの一角へ、大勳位がドツカと座を構えて、昂然として一座を睥睨すると、今迄雑談に喧しかりし此の大廣間は、一時にシーンとして、満場の視線は、一齊に彼れの面上へ注がれた、アンチ伊藤派の豪傑連も、片頬に冷笑を浮かべながら、静かに彼れの方を眺めて居る、二個三個五個、早くも彼れの前に進んで一禮して引下が

る者も有る、彼れは例の悠然なる態度で、左手にシガアをくゆらし、右手に其の鬚髯を撫で下しながら、左右を顧みて話しかけた。伊藤「イヤ歐羅巴の近年の進歩には、實に驚かざるを得ないよ。遙か末座に席を占めたる貴族院議員村田保君が、「へエー成程」と調子を取つた。

伊藤「明治三十年にヅキクトリヤ女皇ジュビリー式典の時に往て其の前の憲法取調の時よりも、非常の進歩をして居るのに驚いたが、それは十五年振りだから、左も有る可き事だ。

村田「へエー如何にも……………」

伊藤「然るに今度はそれ以來僅に三年振りだから、大した變化もなからうと思ふて、往て見て驚いた、實に案外の進歩でねエ。前東京府知事三浦安君が、其の人並すぐれし長身を前に屈して、乗

り出した

三浦「で御座りましたか、ハ、ア

村田君が恭しく一の質問を呈した

村田「では岩倉大使御洋行の時から見ますると、又大變な進歩で御

座いましてやうなア

伊藤「イヤそれは全く隔世の感をなすよ

愚かなる質問と云はぬばかりの顔附きで、大勳位が首を左右に振つたので、相手はハ、アとも言ひ得ず、息を殺して居る

副島老伯の一喝

伊藤大勳位は想ひ出した様に、其の右側に端然として坐して居た副島老伯に向つた

伊藤「副島さん、アナタも年を取られたが、私も年が寄ってコンなに頭が禿げた

大勳位も老伯に對しては、アナタ、ワタシと言つた、老伯は之に對して唯頷肯いたばかりで、佛の如くニコ／＼として居た

伊藤「今の話の岩倉大使の洋行の時は、アナタはタシカ外務卿で在られたと思ふが……」

老伯が口をモガ／＼させて、未だ答へざる前に、村田君が其の話を引き取つた

村田「左様で御座いました、副島伯爵は外務卿、又閣下は工部大輔で副使として御洋行になりましたと記憶致して居ります

伊藤「ソウで有つたよ、丁度今から三十年の昔で、イヤ其頃は我輩も未だ若かつたがねエ

伊藤大勳位はシガアの烟を長閑やかに吐き出して、得意満面と云ふ形で有る、満場は其の鼻意氣に壓倒されて、シーンとして居る、今迄ニコ／＼として佛の様な顔をして居た副島老伯が、突然強い唸る様な聲を出した

老伯其頃は此の伊藤サンを、ホン小僧の様に思ふて居たが、モク頭がコンなに禿げて仕舞ふた、ハツハハハ……

「ホン小僧」と云ふ一語は、凜として満堂に響き渡つた、冷笑を帯びて此等の對話を聽いて居た彼方の豪傑連は、さながら喝采するが如くに老伯の笑聲に和して高く笑ふたので、流石の伊藤大勳位も、止むを得ず、頭を撫して破顔一笑せざるを得なかつた

人格の權威

我輩は此時にツク〜と考へた、人格と云ふ者は争へない者だ、権威赫々たる伊藤大勳位も、此の老伯の前には、頭を擧げることが出来なかつた、君寵に誇り、威望滿廷を壓倒せる此の老元勳に對して、昔はホン小僧の様に思ふて居たと喝破し得る者は、此の清高なる人格を有する老伯にして、初めてなし得る事である、昔は如何に先輩でも、人格の清高ならざる者は、永い間に種々の情實を生じて之れだけの事は言ひ切れなくなる者だ、此人に對して公衆の前で、之れだけの事を言ひ切つて、それで伊藤其人も別に無禮なことを言はれたと云ふ感覺を持たないのは、之れは全く人格の權威で有ると我輩は思ふた、青年伊藤大勳位たる固より難し、然れども彼れよりも一枚上手であつた副島老伯たることは、更らに難いことである、回想して老伯が鶴の如き清姿に及ぶ毎に、「ホン小僧の様に思ふて居る」と

云ふ、さながら神の宣言に似たる強い聲が、今でも耳端に響く様な心地がする



第九 高島嘉右衛門君の道と理

年月日は忘れた、若しも日記帳でも繰つて見たら分かるかも知れぬが、十年ばかり前の事だ、或る日の午後我輩は用事が有て横濱へ出かけるべく、新橋から汽車へ乗った、室へ入ると隅に大きなギロリとした眼の老紳士が居た、能く見ると前大審院長兒島惟謙君で有る、之れぞ日本一の剛情男で薩長藩閥の威力も彼れの強頂を屈せしむる能はず、司法権の獨立は此人の司法部に居る間は、他から侵かされなかつた者だ。

我輩大森へお歸りですか

兒玉「ヤア、どうですか、何處へ

我輩横濱迄参ります

挨拶が済んで雑談をして居ると、驛夫がガタン／＼と汽車の入口を占めた、將さに發車せんとする瞬間に、入口が急に開かれて、ヌーッと脊の高い赭い顔の老人が這入て來た、驛長は此の老人を入れてガタンと戸を占めるや否や、ピーツと發車の笛を鳴らし汽車は直ちにドットン／＼と動き出した

兒玉君の愁ひ顔

老人は汽車が動き出したので、ヒョロ／＼として腰を下ろした途端に、向ふに坐したる兒玉君の顔を見た

老人「オヤ、兒玉サンじや御座いませぬか

兒玉「ヤア高島君か

能く見ると彼の老人こそは、有名なる吞象高島嘉右衛門翁で有る、

翁は最も鄭重なる言葉遣ひをなし

高島「トント御無沙汰を仕りましたが、イツモ御元気で入らッしや

いまして……………」

兒玉君は右手を舉げて頭を撫で上げつゝ

兒玉「イヤ我輩もね、近頃は太分タガが緩るンだよ

高島「ドウ仕りまして、エへ、エへ……………」

兒玉「イヤ高島君、實際だよ、子供を亡くしてからヅンと年を取ッ

たよ

ニヤ／＼笑ッて居た高島翁は之を聞くと急に眞面目になッて、眉根

に皺を寄せた

高島「なッ、なアールほど、ソウ伺ひますれば御子息様は何でした

な、北京で……………」

兒玉「義和團の際にやられてね

高島「實に何とも申上げ様のない、御氣の毒様なことで……………」

兒玉「若かい人達を見ると、ツイ想ひ出して、之れには困まる

高島「御尤も様で御座います

一代の剛情男も情愛の羈絆を脱しかねて、兒玉君の其英雄らしき

かめしき顔に、愁ひの雲が懸ッた、想ひも設けぬ話から車中は濕め

ッばくなッた時、汽車は品川驛に入ッた

得意の易斷

品川驛を發すると高島翁は忽ち話頭を一轉した

高島「義和團と申すとアレも私が易斷で豫じめアノ事件を斷じて置

きましたので……………」

兒玉ハ、ア

高島「チャントと豫かじめ易断を致して、伊藤總理大臣まで内進に及んで置きましたので……」

高島翁は例に依て易断の話を始めた、明治三十三年の夏には東洋の風雲急を告げて、我國も亦兵を動かさなくてはならぬと云ふ事を易に依て豫知した事から説き出し、其の時の卦は何と云ふのが出で、其の意味はコウ、其の卦のドコかが變化して何となる、其の意味はカク、と面白い話を始めた、翁が易断を始めると、一種の光が其の赭黒い面から放射して来て、其の一種輕妙の辯舌と相待て、あたりの人の精神を引き立てるので、兒玉君もスツカリ此の話を釣り込まれ、今まで有った愁ひの影は、名残りなく掃はれて、英雄らしい顔に微笑を含んで謹聴して居たが、其の話の未だ全く盡きざる

中に涼車は大森驛へ着し、兒玉君は下車した

易を信ずるや否や

新橋から三人切りで有った此の一室は、兒玉君が大森で下車した爲めに、高島翁と我輩とのさし向ひとなつた、折角得意の易断を話し始めて興未だ半ばに達せざる所で、聴衆の重もなる一人が下車した爲めに、翁は少からず失望した様で有ったが、大森驛を發すると翁は先づ我輩の行先きを尋ねた

高島「貴君は何處まで

我輩「横濱まで参ります

翁はコレで安心したと云ふ面色で

高島「私は神奈川へ歸るのですが、折角話しかけた易断の事だ、聴

いて下さい

我輩「喜んで拜聴いたします

それから高島翁が話し出した易断の實例、一々は覚えて居らぬが、日清戦争や朝鮮の問題や、敵傍艦の事など、種々の面白い話が有つた末、翁は問ひを起した

高島「勿論貴君方も易は信じられるでしょう

我輩「易は私も好きで、道理に適した所が有ると思ひます

高島「ナニ道理に適した、ソレは話が違ふ、ソウ云ふ頭では易は分らん

翁は急に威丈高になつた、我輩は不意の攻撃に聊か面喰らうたが、何故に翁が此の如く威丈高になつたのか分らなかつた。

理と道とは別なり

高島翁は其の長驅をゾーと伸張して、嚴かなる聲で説き出した

高島「世間で能く道理と云ふが、アレは俗人の間違ひだ、一言に道理と云ふけれど、本来理と道とは別な者で有る

我輩「之れは新説ですが、ドウ云ふワケですか

我輩が膝を乗り出すと、高島翁は大得意になつて「さればな」と説き出した

高島「さればな、當今の御時節では人々が頻りに理の研究に力瘤を入れて御座るが、道を講究する迄に至らないと、社會は進むまいと思はれる、そもく理と云ふ字は玉を里へ出すと書いて有る、玉を里へ出して磨けば磨くほど光るには違ひないが、さて此の

玉なる者は有形の物體で、高が玉に過ぎないのだ
 翁の舌鋒は頗る鋭利なる者となつた、今の大學校などでは窮理の學問を教へるばかりで、書生は皆理屈をコネ廻はすことを覺えるが、さて人物は少しも出來て居ない、之れは全く道を講じない結果なりと罵倒し

高島「然らば道とは果して何ぞやと申すに、道と云ふ字は首が走ると書いて御座る、即ち此の人間の大神精神が走らなくては知ることの出來ない者だ

我輩「ハ、ア

高島「此の頭首に宿せる靈妙なる大神精神がフラフラと抜け出て、天地の間を逍遙して、感悟し知得する所の者が即ち道で有る
 我輩「面白い御説です

高島「即ち理と道とは別物で、道は理屈では分らない、玉は磨けば光るが、道を知るには首が走らなくてはならぬ、理を究めることが如何に精しくても道を知ることには出來ない、而して苟くも天地の大道を知らざる者は、如何に學士となり博士となりても、人間として三本の價値もない者では御座るまいかアツハアツハ
 當今の學士や博士を遺憾なく罵倒し、教育制度の根本を誤れることを最も痛切に批評したる後、アツハアツハと快よく大笑したる時、
 瀛車は神奈川へ着した

高島「イヤ之れはトンだ失禮を致しました、チトお遊びにお出で下さい

翁は其の太とく長い首を一寸下げて出て往つたが、此の面白い話の爲めに鶴見も川崎もイツの間に通過したやら知らなかつた。

第十 下田歌子女史の演説

七八年前麴町區永田町の鍋島侯爵の邸で、東洋婦人會が開かれたことが有つた、我輩も招かれて來賓席へ往つたが、此の日は日清兩國の淑女紳士の集まりで、横濱あたりからも、清國の貴女紳士が大分來會して居た

會長鍋島侯爵夫人が司會者となりて、會は開かれた、巖本善治君が開會の趣意を述べたかと記憶して居る、清國公使楊樞氏、大隈伯爵などの演説も有つた、それから清國婦人の代表者として一女傑が大きな聲で堂々たる演説を試みたが、配附されたるプログラムには、日本婦人の代表者として下田歌子女史が最後に挨拶することが印刷されて有つた

馬鹿々々しい異議

恰かも清國公使楊樞氏が演説を終つた頃、我輩が席を離れて廊下へ出で、來會者の一人と用談をして居ると、或る一貴婦人が我輩に一掛し、小さい聲で

貴婦人「聞いて下さい、又樂屋で馬鹿々々しい議論が始まつてるのよ

我輩「ドンな議論ですか

貴婦人「下田先生ではイケないんですとさ

我輩「何のお話ですか

彼女は大分激昂して居ると見えて、釣り上がった目の縁がポーツと赤くなつて居たが、手に持て居るプログラムを振りながら

貴婦人「アラ、悟りの悪い方ねエ、これなのよ

我輩「成程、下田さんが日本婦人の代表者として挨拶するのはイケない」と云ふ異議が起つたのですか
貴婦人「そうなの、例の嫉妬だワ
我輩「誰れがソンの異議を言ふのです
貴婦人はチレツたいと云ふ様な顔をして
貴婦人「誰れツて、大概分かつてるじや有りませんか、定まつてま
さあね、巖本さんだつて困まつてらつしやることよ
さも悔やしいと云ふ様な顔をして、サツサと向ふの方へ往つた、彼
女は下田女史の崇拜者で有つたから、此の異議に對しては少からず
憤慨して居たので有る

二人で挨拶

大隈伯爵の演説が終つた頃に、或る〇爵夫人が大に氣取てシヤなり
くと歩んで来た
我輩「最後の挨拶の問題はドウ極まりましたか
夫人「オヤ貴下もアノ異議の起つたことを御存じですか
我輩「聞きました
夫人「だつて下田さんに願ふより外に適任者はないんです者を、や
ッぱり下田さんに願ふのですワ
我輩「じやア、プログラムを通りですね
夫人「イ、エ、二人出ることになつたのです
我輩「其の意味が分かり兼ねた
我輩「二人演説するのですか
夫人「イ、エ、二人が會員を代表して前に出て、挨拶は下田さんが

お述べになるのです
 我輩一人は誰れです
 夫人「徳望家の三輪田さんよ
 我輩でも二人出るのは不思議ですね
 夫人「妙でしようオホ……………
 夫人は大きな涼しい目を一抔に開きながら、嘲ける如くに笑ふて去
 ツた

下田女史の挨拶

やがて最後の幕が来た、司會者たる鍋島侯爵夫人は其の美しき音聲
 を以て凜として發言した
 夫人「夫では最後に日本側の會員總代として下田歌子、三輪田眞佐

子の兩女史にお進みを願ひます
 兩女史にお進みを願ひますとは、流石に多年外交の舞臺に在て、か
 かることに物馴れたる會長の機轉で有る、コソな可笑しなことを少
 しも會衆に不思議がらせない様に、唯「お進みを願ひます」と進ませた
 ので有る、
 此の聲に應じて椅子を離れた下田女史は、例の落ち着き拂ふたる態
 度で、會衆の前に現はれた、之に次で三輪田眞佐子刀自がいとすと
 やかに進み出た、三輪田女史は學問も有り見識も有り、又品格も
 立派な老夫人では有るが、何分にも此の如き晴れやかなる席へ出す
 には餘りに年を取居られた、其の風采から言へば、外國人などの
 打ち交じりたる、外交的集會の席へ出すには寧ろ適して居ない方で
 有る、我輩は之を見て覺えず一笑した、下田女史の聲望を嫉む一派

が、此の榮譽ある任務を彼女の獨占に歸せしむることを好まずして、此の老いたる三輪田女史を添えたる爲めに、結果は却て下田女史の風采をして一段の光彩を放たしめたのを見て、覺えず一笑せざるを得なかつた

二人の座が定まると、司會者たる侯爵夫人は滿堂に紹介した

夫人「これから下田さんの御挨拶が有ります

かゝる場合には馴れたる女史の事として、輕るく一禮して少しく前に進みたる、彼女の風采態度、何とも形容の出来ない良い姿で有つた、千代萩の芝居で見る乳人政岡と云つた様な形で、此の良い姿が先づ滿堂を壓倒した、シーンとして水を打つたる如き所で、徐るに説き出したる、其の演説の又巧妙なる、誠に天下第一品で有つた、彼女の舌は一種の魔力を持って居た、其の音聲の抑揚は、殆んど音樂的で有

つた、之に加ふるに其の措辭の巧みなる、殆んど美文を朗讀するが如く、復た一點の非難すべき所が無かつた、僅かに二三分の演説で有つたが、滿場は全く彼女にチャームされて、さながら酔へるが如くなつて仕舞ふた、さしも偉大なる大隈伯爵の演説さへも、此日は殆んど光彩を失ふて仕舞ふた、我輩が今以て忘れることの出来な

いのは其の演説の終りの一句である

下田「ドウが皆さん之れから、國の區別を忘れてゆるりと御挨拶を願ひます

此の御挨拶と云ふ言葉がピーンと會衆の頭へ徹したが、「願ひます」で輕るく首を下げると、三輪田老刀自も亦一所に一禮して演説は全く終りを告げた

敵の計略誤れり

それから各自思ひくく、に廣い美しい園内を散歩して居る時、彼方の一團の間に曩に憤慨した一貴婦人を発見した。我輩が近づくのを見るや否や聲をかけた

貴婦人「今日の下田先生の御演説はホントに成功でしたワね

彼女の目は嬉れしさを以て輝いて居た、我輩は聲を低ふし

我輩「敵は計略を誤りましたよ

貴夫人「何ですと……

我輩「彼所へ三輪田のお婆さんを出すと云ふ法は有りませんよ

貴夫人「ドウしてね

我輩「貴方も悟りの悪い、下田さんがお婆さんに照り返へされて

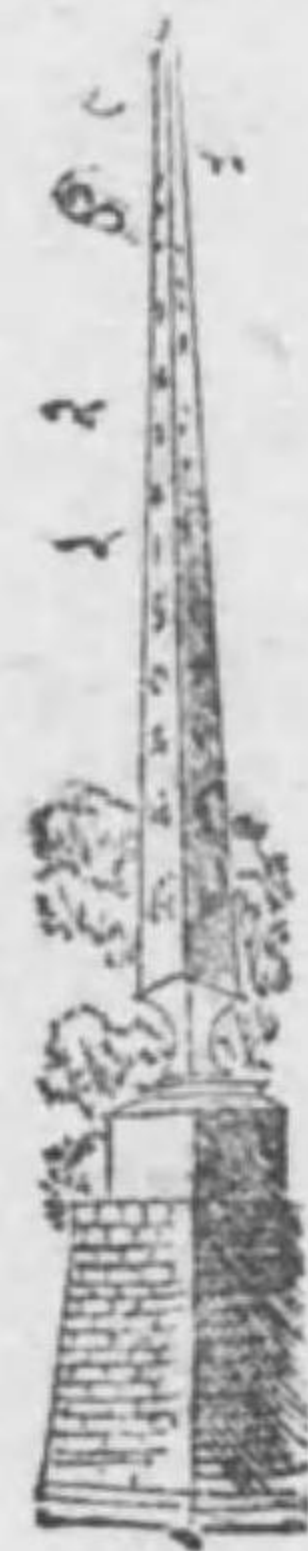
ドンなに美しく見えたか知れませんよ

貴夫人「オホ……

我輩「試みに我輩をして策せしめたならば、三輪田のお婆さんの代りに會員中第一の美人たる松平子爵夫人でも、アレへ立たせるのです、ソウすれば如何に下田先生でも、光を失つたに違ひないのです、敵は計略を誤りましたよ

聞いて居た貴婦人連が、皆腹を抱へて笑ひ出した、凡そ世の中の人々が他人の聲望を嫉んですることは、大概コンな者で、彼れを傷けないとして却て彼れの爲めに良いことをして居る、何の策をも施さないでも、悪い人間は自然に亡んで往くが、何か策を考へてやると、それが却て反對の結果になる、唯今日から考へても氣の毒で有つたのは三輪田女史で、人望が有る爲めに、コンな所へ引き出されて、

随分割の悪い役を務められた、人望家は時々コンな割の悪い役を充てられることを忘れてはならぬ



第十一 大迫將軍と函館

日露戦争が始まつて間もなく、我輩は青森から函館へ渡つたことが有る、露艦が此の津軽海峡へ出沒すると云ふ時の事だ、郵船の尾張丸は二月十五日の拂曉三時に青森を出帆するので、我輩は十四日の午後十一時に舢舨に乗つて出でた、雪は霏々として面を撲ち、波は静かにして萬籟寂たり、頭を回らせば雪を以て蔽はれたる青森は、さながら白雲の如くに横はつて居る、遙かに黒影の突兀として聳ゆる有り、火光數點、即ち尾張丸で有る、舟に乗るや否や直ぐに船室に眠むつた、一睡の後目を開いた時は、既に午前八時を過ぎ、尾張丸は無事に海峡を横切つて、最早や間もなく函館へ着くと云ふ所であつた、衣を改めて食堂へ出づれば、乗客は何れも食事を終り我輩一人

が残つて居た、乃ち急いで朝食を済まして甲板に出でると、其所に時の第七師團長大迫尙敏將軍が、時の北海道長官園田安賢男と話をして居た

我輩「お早ふ御座います」

大迫「ヤア昨夜はトート露艦も影を見せざつた様ですな」

我輩「グツスリ寝込んで仕舞ひまして、何も分りませんでした」

如何にも泰平の様ですな

園田「船長が大に心配して居つたが、先づ無事で良かった」

其の前日、青森で面會して居たから、直ぐに色々の話が始まつた、

談話が日露戦争の事に及ぶと大迫將軍は頗る熱心に種々の意見を吐いた。

日露戦争に關する話

我輩は或る外國人が「日本の軍人は良いけれど、馬が良くないから、騎兵や砲兵の戦争に於て露國に負けるかも知れない」と言つたことを話すと、將軍は首を掉り

大迫「ナアニ歐洲から馬を持つて來るとは思はれない、矢張り多數は支那馬や朝鮮馬や西比利亞馬を使ふのぢやから、日本馬で負ける氣遣ひはない」

將軍は又滿洲馬賊に二種ありて良民を劫掠する馬賊は憎むべきも、團練と稱する一種の馬賊は、屯田兵の如き者で決して不規律の者でないことを語つた、それから遂に斷案を下し

大迫「戦争には必ず勝つ、唯少し長くかゝるから、國民が軍費を續

けて呉れなくつては困まる、國民が金さへ續けて辛抱して呉れるなら、戦争は屹度勝利さ

樺太をも取るべしと云ふ話が出でると、將軍は頷肯きながら大迫年々漁業の收利ばかりでも一千万圓も有ると云ふから、樺太を取り戻して開拓をしたら軍費位はワケもない事だ

將軍は何れの點から見ても、此の戦争の勝利は疑ひなきを斷じたる後、更らに

大迫「唯今度の戦争は永くかゝる、日清戦争よりも永いと覺悟をしなくてはならぬ

此の「永いと覺悟」の一語に十分の力を入れ、繰り返へして國民の倦怠を戒しめた

維新當時の函館

かゝる話の中に函館が段々近いて来た、臥牛山は呼べば應へんとする所迄来た、園田長官はイツの間にやら其の船室へ退いたが、將軍は近ける函館の風景を眺めながら、不圖思ひ出した様に

大迫「私が此所まで来るチューと、何時でも想ひ出す事が有る

我輩「ハ、ア、ドウ云ふ事ですか

大迫「御維新の時の事で、五稜廓を征伐するチューので、大西郷に従つて来た時の事だ

將軍は三十餘年前の往事を語るべく、微笑を其の満面に湛えて、寒い風の吹く甲板の上で話出した

大西郷の果斷

五稜廓の戦ひ豫定の如く速かに平定せず、板本釜次郎を初め、頑強なる幕末の勇士が、奮戦苦闘して、其の陥落はなか／＼容易ならずと聞て、憤然として起ちたる西郷隆盛は、薩州の健兒一隊を引率して、江戸から海路を函館へ向つた、大迫將軍も其の健兒の一人で有つたので有る、

大迫今とは違ひ其の時代の事だから、船も不完全、航海も下手で有つた上に、生憎途中でシケを喰らうて海中に漂ふたので、一同大に弱つた、さうして漸くの事で此の函館の沖へ着いて、此の臥牛山を見た時は、誰れも彼れも皆ホツと息を吐きました、將軍は手を舉げて臥牛山の彼方を指しつゝ、其の當時の喜びの尋常

ならざりしことを語つた

大迫然るにいよ／＼舟が錨を下ろした時、大西郷のみが上陸して、許すと云ふ命令の來る迄、外の者は一人も勝手に上陸することはならぬと云ふ嚴命が下つた

我輩ナル程

大迫一同上陸したいけれど大將の命令は守らねばならぬ、ドウか一刻も早く上陸を許すと云ふ命令が來れば良いと待て居た

我輩ハ、ア

大迫ソウすると暫らくして西郷ドンが舟へ歸て來られて、さうして此の舟は之れから直ぐに江戸へ歸ると云ふ命令だ

我輩江戸へ引返へす……………

大迫既に五稜廓も落城して、此の方面に用事は無くなつたから、

第十二 三宅雪嶺君の韓皇謁見

日露戦争中海軍省が在留國武官、貴衆兩院議員、内外新聞記者を招待して、滿洲丸に搭載し、『旅順陥落を見せる』と云ふ振れ込みで、押し出したことが有る。海軍省からは今の次官財部少將を筆頭として、小笠原長生、宇都宮鼎、矢部辰三郎、松村菊男其他の將校が乗り組み、貴族院からは黒田長成侯、曾我祐準子、船越衛男、廣澤伯真田男等が來り、衆議院からは田口卯吉、横井時雄、江藤新作、大竹貫一、山根正次、小川平吉、菅原傳、本出保太郎等の諸君が來り、新聞記者から三宅雪嶺、塚原澁柿、大岡長、菊池幽芳、本野英吉郎、宮川鐵次郎、安岡秀夫、伊東祐侃、服部暢、山縣五十雄等の諸君が往つたが、我輩も亦報知新聞を代表して此の一行に加はつた。

外國武官は英米獨佛を初め奧以瑞も來り、新聞記者も英米佛獨奧以、皆澤山に來り、其外鍋島桂次郎、鍋島直暎、志賀重昂の諸君も居れば、村田丹陵、東條鉦太郎の兩畫伯も居り、總計五十餘名の大人數で賑やかなことで有つた

同室は三宅雪嶺

明治三十七年六月十二日、滿洲丸に乗て、案内されたる船室へ入て見ると、我輩は雪嶺三宅雄次郎君と同室で有つた

我輩三宅君、貴君は船は強いか弱いか
 我輩が尋ねると、彼れは例の飄逸なる態度で、哲學的なる答をした
 雪嶺人間の氣分は、陸の上に居ても、水の上に居ても、別に變るべき者ではない

我輩理屈は如何にもソウだが、實際は中々ソウ往かない、我輩の如きは波が荒らければ、直ぐと船暈を感ずる方だが、貴君はソウなことは無いかな

雪嶺、有る可き者で無いから無い

若しも三宅君が船が弱いと云ふならば、我輩は下床を彼れに譲る積りで有つたが、強いと云つたので、我輩は更らに尋ねた

我輩、貴君は此の床は上が良いか下が良いか

雪嶺、どちらでも良い

流石は仙骨だから、全く無慾で、別にドウでなくてはならぬと云ふことはない

我輩、それでは甚だ失敬だが、船に弱いから、乗降に便利なる下床を譲て戴きたい

雪嶺君は快よく之を諾し、階子をかけて上床に眠ひることに定まり、之れから凡そ五十日間同室で暮らしたが、其の居常の生活に於て、頗る感服すべき事が多かつた

對韓論を戦はす

一行が韓國京城に向ふ事となり、仁川の沖あたりへ来た時、滿洲丸の船中で、對韓論が起つた、此時我輩は力徳義の三者を以て之に臨むべきを論じたが、雪嶺君は絶對威壓主義で、韓國は必ず日本で取らなくてはならぬ、韓人は懐柔するに由なしと説き、論戦頗る盛になつた、此時江藤君は我輩と同論で、威壓ばかりでは治まらぬと言ひ、横井君は「輕蔑さるゝ者は、自尊心が無い結果だから、韓人も印度人と同じ運命で有らう」と云て、雪嶺君に賛成した、我輩の心

では、江藤君は征韓論者、江藤新平の子だから、威壓主義を賛成し、横井君は必ず我輩と同論で有らうと思ふて居たが、全く其の反対で有つたのは、意外で有つた

皇帝を説くべし

京城へ到着してから、皇帝へ謁見と云ふ事になつた、何分多数の謁見で有るから、武官、貴族院議員、衆議院議員、新聞記者と、順々に謁見し、其の一端の中から總代を先頭に立て、外の者は猥りに發言せず、すべて總代が應答することに定め、貴族院は黒田侯、衆議院は田口君、新聞記者は雪嶺君を總代に推撰して有つたから、謁見の前に我輩は雪嶺君を説いた
我輩「皇帝へ謁見したら、何か大氣焰を吐て、彼れの頭へ打ち込ん

でやりたいと思ふが、貴君には何か考按が有るか

雪嶺「何か問ふたら教へてやつても良い

我輩「問はなくても此方から十分に説てやるが良いと思ふ

雪嶺「ウム、説いてやつても良い

雪嶺君が同意したから、ソコで我輩は此の好機會に於て韓國皇常の前に、日本の新聞記者が説くべき題目に付て、種々に考へ、アレも良からう、此れも良からうと、雪嶺君に話すと彼れは一々ウムと答へ、すべて能く呑み込んで居た

皇帝へ謁見

六月二十五日午後三時半、敦徳殿に於て韓皇へ謁見した、第一に内外武官が謁見し、次は貴族院議員、それから衆議院議員の謁見は

田口君と皇帝との談話が長かつた爲めに、大分時間を取つた、最後にいよいよ新聞記者の番が来たから、雪嶺君を先頭に立て、十餘人プロくと皇帝の前に進んだ、萩原代理公使と國分通譯官が立て居る。萩原、ドウか皆さんの御名刺を……

一行の名刺は、控室に居る間に、先頭の雪嶺君へ渡して置いたが、彼れはそれを其の儘ポケットへ投げ込んで居たので、是に至てポツポツ之を取り出した、其の數を數へて見ても足らぬと見えて、度々ポケットへ手を入れて居るが、ソコは仙骨だから少しも狼狽した様子はなく、平然として一枚づゝ名刺を取り出しては數へて居た

一言を發せず退出

韓國皇帝はソんなことには少しも頓着なく、直ちに話しかけた、新聞

聞記者の一行は何人で有る乎、總べて健康で有る乎、能く京城へ訪ねて呉れたなどと、續々御挨拶が有る、國分君が一々之を通譯したけれど、雪嶺君は先づ名刺を取り揃へる積りで、トンと答へをしな

いから、國分君は其の場を取り繕ふて、良い位に奏上する、漸く雪嶺君の名刺が揃ふた頃には、韓皇は一切の問答を終て、モウ歸れば良いと云ふ顔附きだ、そこで萩原公使は各々一禮して引き取り玉へと云ふので、雪嶺君は終に韓皇の前に、一語をも發せずして、一禮して去れば、それから塚原君以下年齢順で、我輩共新聞記者一同、一言を發せずして引き取つた

アレで澤山だ

我輩は此の好機會を逸したることを甚だ遺憾に思ふたから、控室へ

歸てから、シャンパンを舉げて居る時に、雪嶺君に向ひ
 我輩ドウも此の謁見は馬鹿々々しかつた、此の好機會を逸したの
 は誠に残念で有つた、三宅君はナゼ何事をも言はなかつたか
 我輩は憤然として之を言つたが、雪嶺君は少しも聲色を動かさず
 雪嶺「ナアニ、あんな者にはアレで澤山だ、何を言つたつて分かる
 者か、ア、してお辭儀をして置けば澤山だ
 極めて平然たる者で有る、我輩が皇帝の頭に何事かを打ち込むべき
 此の好機會を逸したのは残念だと云ふに同意した連中も、雪嶺君が
 飄々たる仙骨を以て「アレで澤山だ」と云へば、マア仕方がないと
 誰も雪嶺君を責むる者もなかつた、而して今日になつて考へて見れ
 ば、雪嶺君の言つた通り、全くアレで澤山で有つた、日韓合邦の今
 日に於ては、最早や一言の言ふべきことも無い

自然にスラリと往く

我輩共は兎角凝り固まる所が有て困まる、ゴウ云ふ機會に乗じて、
 一番コウしてやらうと云ふ様に、兎角霸氣が有てイケないが、雪嶺
 君の如きは天稟に於て、徳の高い所が有る、其のボンヤリして自然
 に往く所に、何とも言へない甘味が有る、韓皇の前に出て、雪嶺君
 は何をして居るか、我輩が列の後方から彼方を見た時に、極めて
 ノン氣な風采で、悠々として名刺を數へ、其の足らざる分を取り出
 すべく、其のポケットを探ぐつて居た彼れの風采は、今尙眼底に残
 ツて忘れることは出来ないが、コウ云ふ所になると、雪嶺君の如き
 は氣焰を吐いても吐かなくても、すべて自然にスラリと往くので、
 其の風韻の高い所は、我輩などの企て及ぶ所でない

第十三 ナイト夫人の祈禱

日露講和會議がボーツマウスに開かれて居る内、世界の諸方面から種々の名士が、此の一角へ集まつたが、此の機會に於てボーツマウス市やボストン市其他の市民中、此方面へ來た世界の諸名士を招聘して或は饗應の宴を開き、或は講演の席を設けた者は、當に三四の例に止まらなかつた、我輩の如きも諸方から歡迎されたが、八月十九日の午前クラーク博士が訪ねて來た

クラ「ボーツマウス市のナイト夫人が今夜自邸で晚餐を饗したいと申して居ますが御都合は如何ですか

我輩「ナイト夫人とはドウ云ふ人ですか

クラ「ボーツマウス市に於ける最年長者です、本年取て九十一歳、

なか／＼元氣なエライ婦人で市民が尊敬して居る老夫人です、クラーク博士は曾て日本の大學南校に教師を務めて居たことが有るので、小村全權大使は自分が曾て教育した弟子であると言つて、威張つて居る男である

クラ「今夜はホンの小宴で、本多君と貴君と私との外には若かい令嬢が二人だけです

本多君とは青山學院總理本多庸一君の事で、歐州からの歸途明治學院總理井深棍之助君と共に、ボーツマウス講和會議の情況を視察する爲めに、一寸此地へ立ち寄つたので有る

枯木の如き老夫人

豫定の時刻に往つて見ると家は小さいが奇麗な住居で有る、クラーク

博士が居た、リツトル嬢とジウエツト嬢にも紹介せられた、やがて出で来りしナイト夫人を見るに、流石に氣品の高い所は有るが、何分にも寄る年波で、甚しく瘦せて骨と皮ばかりになり、抜けて少なくなつた光りのない白い髪を後に束ねて、一見すると殆んど枯木の如き者だ、黒い服に包まれた枯木の如き老夫人で、握手した時にも枯木の小枝を握つた様な心地で、手の温味も至て低くかつた、クラーク博士はエライ婦人だと言つたが、應接室で逢ふた時には、之れでドコがエライのかと聊か疑はれた

熱心なる祈禱

時間が来て食堂は開かれた、小さい室だが奇麗に飾られて有て、食器も粗末ならず總べて整頓して居た、いよゝゝ食事が始まると云ふ

時に、主人なる老夫人が祈禱を始めた、簡單なる祈禱で有らうと思ふて居ると、段々進んで来て太い強い聲が出て来た

夫人、神よ、我等に平和を與へ玉へ

夫人の右方には本多君が坐し、我輩の席は夫人の左方に在つたが、彼女が此のピース(平和)と云ふ一語を言つた時に、其の入れ歯の間を漏れて、大きな唾沫が飛んで前のスープの中に落ちたのがチラリと見えた、スープの皿の前にはパンも有ればバターも有り鹽も有る、之れは來客に頼たるべき者であるから夫人の唾が盛に飛ぶのを見た時我輩はハツと思ふた

我輩夫人の唾がアんなに飛んでは之れはトンダ御馳走を食はされる事だ、恐れ入つた事だ

腹の中で我輩がコウ思ひながら、窃かに對面の本多君をチョツと見

ると、謹厚にして敬虔なる老紳士の少しく禿げれる前額は、此の祈禱に十分の敬意を表せるが如くビリとも動かすに垂れて居る。我輩も之れに感化せられて覺えず頭を低下したる瞬間、老夫人の強い力の有る聲が、さながら猛獸の唸るが如くに響いた

老夫人「神よ、我等に平和を與へ玉へ」

一種の力ある聲で我輩の垂れたる頭上を壓迫する様な感じがした、之を聞くと電氣に打たれたるが如く精神が引き締まつて來たので、耳を傾けて彼女が何事を祈れるやと聽いて見ると、其の祈禱たるや實に堂々たる大文章で有つた

夫人「日本と露國が干戈を交えて相殺戮するは最も悲しむべき出來事にして、其の如何なる原因たるを問はず、我等の好まざる所である、神よ、願くは、此の兩國民が一日も速かに平和を克復して

其の戦争の惨害より免るゝことを得せしめ玉へ

老夫人の力ある聲は、更らに一步を進めて米國と日露兩國の關係を語つた

夫人「露國は曾て四十餘年前南北戦争の際に我が米國に深厚なる友誼を示した國で有る、日本は曾て五十年前に我米國が其の手を執て開いた國で有る、如何なる事情あるにもせよ、此の米國と親しき兩國が兵火を交へて相争ふは、我等の好まざる所である、神よ願くは平和を與へ玉へ」

ルーズヴェルトと云ふ聲が突然に現はれたが、彼女の目から見れば、一代の偉人アオドル、ルーズヴェルト大統領も一の愛らしい孫の如く感ぜられる者らしい

夫人「賢きルーズヴェルトは我等の意に適する所の良き勸告を兩國

に致した者で有る、神よ、願くばテオドルの忠誠なる心を嘉みし玉ふて、彼れが仲介の勞の空しからざる様テオドルを恵み玉へ願くば日露兩國の上に大なる恵みを與へて其の平和を克復し玉へ大祈禱、大演説、大文章、熱心なる聲、力ある聲、電氣の如くに人を感動せしむる聲は凡そ七八分間も續いた、それから食事中も食後も談論がなかく、確かな者で、學問も有り、識見も有り、世界の大勢にも通じて居て、覺えず人をして畏敬の念を生ぜしむる者が有つた

米國繁昌の基礎

其の全身は瘦せて、顔にも手にも無数の小皺が有て衰へたること宛然枯木の如くに見ゆる此の老夫人に、是れだけの元氣と識見が有ら

うとは、全く意外で有つたが、米國の田舎にはコウ云ふ健全なる老夫人が今でも到る處に存在して居て、米國文明の基礎を成して居るので有る、ニューヨーク市やワシントン市や將たシカゴ市や都會の花やかな皮相の文明を見て、直ちに米國の真相なりと思ふ者が有つたならば、それは大なる誤解でなくてはならぬ、米國が繁榮する健全なる基礎は、却て人の目に着かぬ田舎のコウ云ふ人々の間に存するので有る

第十四 君ヶ代の合唱(高平大使と 埴原書記官)

明治三十八年の夏、米國のグリーンエカルと云ふ所で平和主義の夏季講習會が開かれた、我輩も會長フアマル女史の依頼に應じて、兩三回講演に往つたが、其の最初の日に永く忘るべからざる滑稽が有つた、此の日は我輩の外に三四人の講演者が有つたが時の米國大使高平小五郎君も一席の演説を依頼されて、書記官埴原正直君と共に臨席した、やがて開會の時刻となつて、我等は導かれて會場に入り、其の一壇高い所に設けられた椅子に憑て居ると、フアマル女史は高平君の傍へ來た

フア「今日は外に講演者もありますが、日本紳士が三名迄も御臨場

は、本會が特に光榮とする所ですから、ドウか日本の國歌を開會の初めに唱へたいと思ひます、三君の内、ドナタかお歌ひ下さいませいか

高平「宜しい、承知しました

我輩は腹の中で飛んだ事が持ち上がった者だと思ふて居ると、高平君は至て無造作に之を引受けたる後

高平「埴原君、君一トツ歌ひ給へ

埴原「何をですか

高平「君ヶ代を一トツ

埴原「笑談仰しやツちやあいけません、私は御承知の通り、歌は何も出來ません

高平「君ヶ代は出來るだらう

第十四 君ヶ代の合唱(高平大使と 埴原書記官)

明治三十八年の夏、米國のグリーンエカルと云ふ所で平和主義の夏季講習會が開かれた、我輩も會長フアマル女史の依頼に應じて、兩三回講演に往つたが、其の最初の日に永く忘るべからざる滑稽が有つた、此の日は我輩の外に三四人の講演者が有つたが時の米國大使高平小五郎君も一席の演説を依頼されて、書記官埴原正直君と共に臨席した、やがて開會の時刻となつて、我等は導かれて會場に入り、其の一壇高い所に設けられた椅子に憑て居ると、フアマル女史は高平君の傍へ來た

「フエ、今日は外に講演者もありませんが、日本紳士が三名迄も御臨場

は、本會が特に光榮とする所ですから、ドウか日本の國歌を開會の初めに唱へたいと思ひます、三君の内、ドナタかお歌ひ下さいませまいか

高平「宜しい、承知しました

我輩は腹の中で飛んだ事が持ち上がった者だと思ふて居ると、高平君は至て無造作に之を引受けたる後

高平「埴原君、君一トツ歌ひ給へ

埴原「何をですか

高平「君ヶ代を一トツ

埴原「笑談仰しやツちやあいけません、私は御承知の通り、歌は何も出來ません

高平「君ヶ代は出来るだらう

埴原「イ、エ兎ても出来ません

埴原君は頭を掻いて引き退がると、高平君は忽ち我輩に向つた

高平「それでは石川君、ドウですか一寸君ヶ代の獨吟を願ひたい者
で……………」

我輩「ドウ致しまして……………」

高平「そうか、それは困まつたなア

よくよくブキツチヨな者ばかり揃ふた者だと云ふ様な顔をして、高
平君が困まつて居るので、我輩は注意した

我輩「寧ろ貴君がおやりになつては如何

高平「實は我輩も……………」

高平君も獨吟をやるだけの自信はなかつたが、埴原君か我輩がやるだ
らうと思ふて無造作に引受けたので有る

埴原「イツそお断りになつてはドウですか

我輩「然かしながら日本人として日本の國歌を歌ひ得ないと云ふた
ら國辱になるかも知れないから、之れは何とかせねばなるまい

高平「ソウダ、そこも有る

三人當惑の額を集めて相談して居る所へ、フアマル女史がツカ
と來た

フア「モウ始めますが、三君の内でもドナタがお歌ひ下さいますか
會長の催促が來たので、いよいよ時機が切迫して來た。

三人合唱に決す

是に於て我輩が進んで提議をした

我輩「止むを得ずんば三人一所に歌ひましようか

壇原「然かし兎てもオルガンにもピアノにも合ふ氣遣ひはない
我輩「ソソなら樂器なしで三人でやらうではないか

高平「それが良からう

フアマル女史は再び催促した

ア「それでは始めますが、お歌ひになる方を私から御紹介致しま
しよう

高平「三人一所にコーラスでやります

ア「三人合唱、オーそれは格別結構です

高平「然かし樂器は入らないです

フ「樂器なしですと(Without instrument?)

女史が怪訝な顔をしたので、我輩が言葉を添えた

我輩「特別の調子です

フ「特別の調子ですと、それは結構(Special tune! Oh fine!)

快活なる會長フアマル女史は直ちに其の流暢なる辯舌を揮て、本日
の來賓たる三人の尊敬すべき日本紳士が、其の光榮ある國歌君ヶ代
を歌ふことを紹介し、特に樂器を用ひず、特別の音調を以て歌ふこ
とを紹介した、満場五六百の聴衆は大喝采を以て我等三人を迎へた

キーミーから始める

音樂の素養を有せざる我等三人は屠所の羊の如くに演壇に進み出で
た、高平君に次で我輩が立て壇原君と三人相並んだ、聴衆が大喝采
をして居る間は、未だ良かつたが喝采が終ると、我等の特別の調子
を聴くべく鳴りを鎮めた、サア弱ツた、三人共に誰れが一番先に
聲を發するかと伺ひ合ふて居るとなかく、誰れも出さない、暫らく

は無言で立ッて居る、偶然に高平君が勿體振ッた咳拂ひをゴホンと一トツやツた、満場は此の威嚴ある咳拂ひを聴いて、さながら静肅を要求する合圖を受けたかの如くシーンとなツた、併かしながら尙無言で有る、芝居道で言ふならば、餘程間の延びた形で有る、かくては果てじと勇氣を揮るツた我輩が甚だ覺束ないけれども試験的に

我輩、キーミー

高低のない無意味な聲を發すると、左方に立てる高平君は謠曲式の太い聲で、唸るが如くにキーミーと乙で歌ひ出し、同時に右方の垣原君は又二上がり式の途方もない甲高な聲でキーミーと調子外づれにやり出したので、中央に立てる我輩は覺えず吹き出したくなつたが、苟くも三人合唱と名の附く以上は何とか調子を合はせて見たいと思ふけれど、何分にも一方は馬鹿に高い所へ、一方は又途方もな

く低いのだから、果してドチラへ附隨して良いやら分らない、可笑しくも有れば又苦しくも有る、

強い非音樂的なガー

それからガーヨーワーと來たが、此のガーが又非常なガーになツて、世界の唱歌者が曾て發したることなき強いガーで有ツた、勿論如何なる樂器と雖も苟くも樂器と名の附く以上は、それより發する音調に決して調和すべからざるガーで有ツた、五六百の聴衆も恐らくは絶對的に非音樂的なる此のガーには驚いたらう、成程、日本紳士のスペシアルチューンは違ツた者だと思ふたで有らう、何れも呆れた様な顔をして聴いて居たが、中には妙齡の少女で堪えかねてクスクス笑ひ出したものも有る、ハンカチを口に蔽ふて笑ひを堪えて居る

のも見える、

千代に八千代に

ヨーワーが濟ひと、三人共に聲をポツーンと途切ツて、ホツと一ト息吐いた、再び勇氣を振ひ起して「千代に八千代に」とさしかゝつたが、其の困難たる實にポーツマウスの講和談判以上の難局で有る、此のチーヨのチーを埴原君が如何に高く引き上げたかは、恐らくは何人も想像することは出来まい、さながら凧が春風に翻つた様に、高く高くと引き上げて、殆んど糸の切れんとする迄に引き上げた、然るに又一方の高平君の膽力に至ては非凡な者で、泰然自若と落ちて着き拂ふて、低い平板な調子で、何等の抑揚もなく、勿論他の聲調に頓着する所なく、一直邁進主義で、自分ばかりサツサと八千代迄

漕ぎ附けて仕舞ふた、

さゝれいしに巖

進んで「さゝれいしに及ぶや、兎ても舞臺は持ち切れなくなつた、夏では有つたが總身ビツシヨリと汗が出でた、勿論心地の良い汗ではなくて冷汗と云ふ一種凄惨なる汗で有る、此の「さゝれいし」と云ふ所で、高平君が急に思ひ出した様に節を附け出し、「イーシー」と長く引張つた時は、果して聲が何處迄落ちて行くことかと危ぶまれたが、既にして「巖」を通過して「ナアーリーター」に至るや、埴原君は不圖其の聲を丸く浮かして、朝太夫がケレンでサワリを語て居る様な節廻はしにやつたので、我輩は心の中でオヤ〜と驚いた

最も苦しい事

かくていよいよ、昔の蒸す迄には、三人共にグツタリと疲勞して、大きく言へば殆んど生きたる心地はなかつた、漸くにして唱歌を終はつて椅子に戻つた時は、頭がフラフラして「世界に何が苦しいと言つて、君ヶ代の唱歌位苦しい者はない」と云ふ感じが起つた、之れ以來君ヶ代の唱歌を聴く毎に、此の滑稽を回想して自ら笑を禁することが出来な、昨年久し振りで埴原君が北京へ来た時にも此の話をしたので大に笑ふたことが有る、高平君も外交官中の先輩で外交の事には通じて居るが、唱歌は甘まく出来ない方で有る、埴原君も任に米國に在ること十餘年、ワシントンの社交界で最も人望あり、未來の大使に擬せられて居たが、唱歌に至ては我輩共と同じく調子外づれで

有る、今日の青年には少しもコウ云ふ心配はないが、我輩共は學校で唱歌と云ふ者を學ばなかつた爲めに、今以て君ヶ代さへも満足に歌へないので有る



第十五 逆境に陥れるレウ井ツト夫人

米國ボストン市に滯留中、我輩は携へたる幾多の紹介状の中から、一通の注意すべき書翰を發見した、明治女學校々々長巖本善治君から、我輩をレヴヰット夫人に宛て、紹介した者である

レヴヰット夫人とは如何なる人ぞ、今の日本の青年男女の間には、其名を知らざる人も多からんが、彼女は我輩が少年時代に於て、深くも敬慕した理想的佳人であつたから、我輩は日本を出發する際、特に巖本君の紹介状を請ふたのである

ホテル、ツレーレンの一室に於て、多くの紹介状の中から此一通を發見して、覺えず微笑してゐる所へ、二人の婦人客が有つた、一人

はローウエル銀行頭取グリデン氏の夫人、他の一人はポーツマウス青年會長キムボール氏の令嬢であつた

「夫人、何か嬉しい事があると見えて、ニコ／＼してゐらっしゃる事ね

我輩「實は今少し嬉しい手紙を發見したのです

「夫人、嬉しい手紙ツて、ドンナ手紙

我輩「紹介状です

「キ嬢、今から其の紹介状でお逢ひなさるのですか

我輩「さうです、ですけれど昔から知つてゐる貴女です

「夫人、オヤ知てゐらっしゃるの

「キ嬢、貴女ツて誰方、ボストンの方?

我輩「永い間敬慕した佳人で、二十年間會て忘れたことのない佳人

です

キ嬢「マア

キムポール嬢は呆れて仕舞ふたが、グラデン夫人は疑問の矢を放つた

「夫人」知ッて居らッしやるのに、紹介状とは可笑しいでは有りませんか

我輩「此方は其の貴女を知ッて居ますが、向ふが我輩を知ッて居ないので

我輩は更らに詳かに其の事情を説いた

我輩「今から二十年ばかり以前に、米國から一人の偉大なる貴女が日本に参りました、彼女は氣品の高い、思想の立派な而して火の如き熱烈なる雄辯を以て、我が國民に偉大なる感化を與へました

兩人の米國婦人は熱心に我輩の談話を傾聴し始めた

我輩「彼女は東京は勿論、日本の諸所の都會に於て、演説を試み、到る處に喝采を博し、當時の日本國民は殆んど彼女を以て、女神の來降の如くに尊敬しました、而して我輩が初めて彼女を見たのは、備前岡山に於ける基督教會堂に於てです

「夫人」岡山と云へば貴君の御郷里

我輩「さうです、我輩が聴衆の一人として、其の會堂に這入ッた時演壇に立ちたる米國の一貴女こそ、二十年間曾て忘れなかつた其人です

キ嬢「どんな方

我輩「色の白い、品の良い、脊のストラリと高い一貴女が、清い光を放つ兩眼で、高い演壇から多數の聴衆を視ながら、美しい聲で、

明晰なる論理を趣味ある言葉で説き出された時、我輩は覺えず酔
ツて仕舞ひました

グリデン夫人は問ひかけた

「夫人、何の演説ですか、矢張り基督教の演説ですか

我輩「其の貴女は米國禁酒會の特派員でしたから、禁酒の演説でし

た

兩人は均しく叫んだ

兩人「マア誰でしやう

我輩は巖本君の紹介狀を見せた、其の表紙を見て兩人は目と目を見
合せた

「キ、レヅビット夫人、伺った事のあるお名前ですわね

「夫人「ハテ誰でしよう

隣室に居たグリデン氏が肥大なる體軀で、悠々と這入ッて來た、夫
人が見ると直に聲をかけた

夫人「モシ、チャーレイ

グリデン氏の名はチャーレスと云ふので、夫人は何時でも彼れをチ
ャーレイと呼ぶのだ

夫人「レヅビット夫人と云ふ人を覺えて居ますか、禁酒會に働いた
人ださうですが……

グリデン氏は太い聲で答へた

「氏「其人は死んだかも知れぬ

我輩は驚いた

我輩「オヤ死にましたか

「氏「イヤ待ち給へ、未だ生きてゐるかも知れぬ

我輩は紹介状を示して言ッた

我輩此のポストン市のツレモント街に住んでゐると聞きました
グ「さうですかねエ、アノ婦人も一時はエライ勢であつたが、近年
はトント見ない、若し生きて居ても、社会的には死んで居る

彼れは夫人に向ツて

グ「ホラお母さんなどの働かれた時代に、レヅ井ツト夫人と云ふ人
が有つたではないか

夫人「アラ、あのレヅ井ツト夫人の事ですか、ソンなら私も知てゐ
ますワ

我輩御存知ですか

夫人「知てゐますとも、だけでも、貴君、アノ方なら随分お婆さん
ですワ

我輩さうですか、今幾ツ位でしよう

夫人「ドウしてモウ七十を過ぎてゐましようよ

夫人は言ひながらオホ………と一笑した、我輩が二十年間忘れない
佳人などと言ッた者だから、今でも年の若い婦人かと思ふて居た
ので有らう

夫人の返書

巖本君の紹介状を封入して、レヅ井ツト夫人に面會を求めたる翌日、
多くの手紙の中からレヅ井ツト夫人の返書を発見した、消印を見る
と昨夜遅く出した者らしい、我輩は先づ之を開いて見た

千九百五年九月十三日水曜日
親愛なる君よ

逆境に陥れるレヅ井ツト夫人

妾がよく記憶せる巖本善治君の友人たる御身の來訪を受くる事は
 妾の甚だ幸とする處なり
 明木曜日午前十一時と午後一時の間、若しくは三時以後に御身と
 相見んことを望む
 若し御身が明日妾を訪ふ能はずんば、何れの日に於ても同じ時間
 に來訪あれば、必ず喜んで御逢ひ申すべし
 御身は妾を信じ給へ、妾は妾の親愛なる日本——光輝ある日本よ
 り來れる人を見る事を此上もなき幸と思へる事を信じ給へよ

御身の誠實なる

メリイ、クレメント、レヅビット

我輩は之を讀んで其の美しい風韻の有る手蹟と、其の文字の間より
 來る一種のインスピレーションに打たれて、暫らくは茫然として居

ると二十五年前に見た氣品のある美しいレヅビット夫人が眼前にア
 リくと現はれて來た

物凄いい廊下

レヅビット夫人の住所は、巖本君の紹介状にも、又夫人の書面にも
 ツレモント街百五十九番と有つた
 ツレモント街と云ふのは、ポストン市の廣い通で、我輩が宿泊して
 わたホテル、ツイレモンも亦同じツレモント街にあるので、單に其町
 名のみを聞いたばかりで、我輩は夫人の家の如何に美しく、如何に
 宏大なるかを想像した
 夫人は「午前十一時から一時の間、若しくは三時以後に來て呉れ」と書い
 てあるので、我輩は午前中に往かふと思ふた所が生憎來客があつた

ので、午後ゴウゴに延のばし午後ゴウゴ三時ジを打うつと、我輩ワガハは急いそいで馬車ハシヤを命めいじた

我輩ワガハツレモント街カイの百五十九番ハン

馬丁ハチンは旨旨を領りやうして、コムモン、パークパークに沿そふて一ひと走り、やがて狭せまい入口いりぐちの所ところへ車くるまを着つけた

我輩ワガハツレモント街カイの百五十九番ハンだが、間違まちがッてはゐないか

馬工バウ決けつして間違まちがつては居かませぬ

馬丁ハチンは鞭むちを舉あげて、入口いりぐちの上部じやうぶに書かいて有ある数字すうじを指さし示しした、成なる程ほど、見みると大おほきな字じで明あらかに159159と書かいてある、我輩ワガハは馬車ハシヤを下くだり、其入口そのいりぐちの横よこの商店しょうてんの男おとこに尋たづねた

我輩ワガハレヴヰット夫人ふじんの邸宅ていたくは、此この邊へんに在ありますか

男おとこ「知りません」

ドウモ間違まちがつてゐる様やうに思おもはれるが、ツレモント街カイの百五十九番ハンは

此この外ほかにないから、或あるひは是これは夫人ふじんの事務所じむしょかも知しれぬと思おもひ返かええて、中なかに這はい入いつた、百五十九番ハンは狭せまい入口いりぐちから這はい入いつた高たかい建築けんちくで、突つき當あたりにエレヴエートルエレヴエートルがある、僕ぼくは其そのエレヴエートルエレヴエートルの男おとこに尋たづねた

我輩ワガハ此中こなかにレヴヰット夫人ふじんと云いふ婦人ふじんが居かられますか

男おとこ「さうです、九階かいのAAです」

我輩ワガハは驚おどろいた、米國べいこくでは良よい室むろは高たかい所ところにはないから夫人ふじんが九階かいに事務所じむしょを持つてゐると言いふので、意い外ぐわいの感かんをしたが、何なにしろ居かると云いふのだから、直すぐにエレヴエートルエレヴエートルに乗のると、忽たちまちの中うちに九階かいへ引ひ上げて呉くれた、我輩ワガハがエレヴエートルエレヴエートルを出でる時とき、男おとこは顯あで一隅いっくを示しめた

男おとこ「レヴヰット夫人ふじんは彼所あそこです」

言ふたかと思ふと、早くも降下して仕舞つた。我輩は薄暗い廊下に立つて四邊を見廻した、森として何の音もなく、我輩が一步を動かすと、靴の音が壁に反響して物凄く一種の鬼氣に打たれた

黒服の夫人

薄暗い廊下を見廻したが、何れの室がAで何れの室がBであるのか、薩張り分らぬ、エレヅエートルの男が顯で教へて呉れた方角へ往つて見たが分らぬ
廊下は頗る不潔で、一種の異臭が有つて、貴婦人が事務所でも置いて居る所とは思はれない、愈々怪しいと思ふて、再び右の方へ往つた時に、一隅から何か唸るやうな聲がした、戸の外で暫らく室の様子を伺つて居ると、其聲が止んだ、試に戸を叩いて見た、暫らくす

ると戸は開いたが、眼の凄く、髭の蓬々と生えた、年頃五十ばかりの男が顔だけ出した
男「お前は誰れだい
凄く目でギロリと睨み、途端に異臭を放つたが、我輩は呻に問ふた
我輩一寸お尋ね致しますが、此の九階に貴婦人の事務所はありませんか

男「ナニ貴婦人、ソナ者は此廊下には住まねエよ、馬鹿々々しい怒りの聲を振り立てながら、ビツシヤリ戸を叩いて仕舞つた、此男の風采態度から見れば、其の言葉つきから見ても、決して立派な紳士ではない、是に於て我輩は愈々此の番地が間違であると思ふた、レヅ井ツト夫人とも言はるゝ人が、コンな下等人間と伍して住んで

居るワケがないと思つて、再びエレヴェートルの所へ來かゝつた所へ、左の隅の戸がスツツと開いた、オヤと思ふて振り返へると黒い服を纏ふた蒼白い顔の人が立つてゐる

我輩「レヅ井ツト夫人と言ふが、此の階上にゐられませぬか
我輩が問ひかけると、其黒い影は戸の外に一步出て

婦人「私が其のレヅ井ツトですが、貴君は日本のお方ではありませ

んか

美しい聲でハツキリ答へられて、我輩の胸は、急に波打つて來た

我輩「さうです、お手紙を今朝拜見致しまして……………」

夫人「さうですか、マア、能く尋ねて下さいました

夫人は直ちに手を出された、我輩が之を握つた時に、我輩は、其薄暗い所に立つてゐる黒服の夫人の氣品が、二十年前と聊かも異なる

所なきを感じた

襪褌に包んだ玉

有名なるレヅ井ツト夫人を、コウ云ふムサくるしい所で見やうとは此時迄も思ひ設けなかつたが、一度夫人を見るに及んで我輩の心は周圍の總てのイヤな物を忘れて唯高貴なる夫人の氣品に打たれた
錦で包んでも瓦は瓦で、玉は襪褌に包まれて居ても、美しい光を放つ、イヤ眞實を申すなら、瓦が錦に包まれた程醜くい者はなくて、襪褌の中から美しい玉の光を見せられた時ほどに、人の心を動かす者はない

レヅ井ツト夫人は、ソナナムサイヒドい所に住んでゐても其氣品は失なはれてゐなかつた、二十年の昔、我輩が演壇で見た其人と少しも

變らず、更らに柔和な、ユツたりとした、嬉しい風采で、其の周囲のイヤな空気が、些毫も夫人の美しい性格を傷けてゐないのを見た

レ夫人「マア此方へお這入り下さい

夫人の此の挨拶は、米國の貴婦人が、其豪華なる應接室へ客を導く口吻と、少しも異なる所がなかつたが、室に入つた我輩は益々驚い

た

疊敷にしたら十五六疊も敷けるであらう、狭まゝいことはないが、光線の工合ひが悪くて、何となく薄暗い、周囲の壁は破れて居て、室内が荒れ果てゝ居る、室内にカーペットが敷いてないから歩むとガタ／＼と音がして、それが荒れ果てた四壁に反響して、薄氣味が悪る

レ夫人「ドウぞおかけ下さい

我輩はソコにあつた椅子にかけようとしたが、破損してゐる者と見えて、椅子の脚が、ギ／＼音がした

レ夫人「アラそれはイケませんよ
他の椅子を出して

レ夫人「此方が未だ良う御座います、アレは損じて居ますから夫人はかく言ひかけて、オホ………と打ち笑つた、我輩は身體の度を失つて、却つてキマリが悪くなつたので、其儘其の椅子に腰を下した

雄大なる意見

室の中央に大きな古い机が有つて、其上に種々な物が並べてある、其種類は世界各國の珍品であるが、一も完全な物はなくて、珍らし

い木像の手のないのや、尊い磁器の缺けたのなどが置いてある、夫人の腰を掛けて居る安樂椅子は、長い間夫人の用ひた物と見えて、古く成つてはゐるが、其の物は良くて夫人が盛んな時に買ふた物らしく、房などが下つて居る

夫人「マア能く尋ねて下さいました、近來はホントに來客と云ふ者はありませんので淋しく暮してゐますの

夫人の聲は美しいが、窓からさし込む光に照らして、其容貌を見るに、痛々しくも老ひて居る、其の氣品は高く、其の態度は貴婦人たるに少しの變りもないが、頭髮は白くなつて居り、頬は窪んで居り、齒は抜けて居る、シカシながら變らぬ者は、星のやうな光のある瞳である、噫、意味多き夫人の此の瞳こそは、曾て世界幾多の人を感化し救済したる慈悲深い者ではないか

夫人「私もモウ齡を取りましてね、世の中からは退いて仕舞ひました、新聞だけは讀んでゐますよ

机の上に在つたポストン、ヘラルドとポストン、グローブの兩新聞を取り上げて

夫人「日本の近年の活動は、蔭ながらホントに嬉しく思つてゐますよ

此の貧しい生活の中に在つても尙常に新聞を讀んで、世界の大事に通じてゐる處は、流石にレヅビット夫人である

夫人「私が日本へ參つた時から、モウ二十年になります、此の二十年間に日本の進歩の偉大なるは、全く不思議です、ドウモ人間の間力とは思はれない位です

夫人は日本が憲法を作り、議會を設け、先づ清國と戦ふて勝ち、遂

に露國と戦ふて勝ちたる過去二十年間の歴史を評論し、更らに露國の失敗したる原因を滔々と説き出して、少しも倦む所がなかつた其の辯説と言ひ、其の見識と言ひ、實に堂々たる者である、コンナムサイ暗らい室に、貧しい暮らしをして居る七十以上の老夫人の口から、此の如き雄大なる意見を聞き得るとは、機敏を誇る米國記者も、ヨモや氣が付き得まいと、我輩は夫人に對する敬虔の情を益々深ふした

日本飲酒高の減少

机の上に傷の附いた古い地球儀があつた、夫人は立つて之を廻はしながら

夫人「私が世界を一週しました時から見ると、世界が大變に進歩し

ましたね

言ひつゝ再び安樂椅子に腰を下し

夫人「平和主義が盛んに成つて來たではありませんか

夫人の顔には光明の輝きが漂い初めた

夫人「英國も長い間保守黨が政權を取つて居ましたが、國民は段々

飽いて來て、モウ近の中に自由黨の天下に成るやうですね、グラ

ツドストンの銅像の出來上る頃には、今のバルフォア内閣は倒れ

るだらふと、私は楽しむで見て居ますの

夫人は手を膝の上に組んだ

夫人「佛國も今のルーベール大統領は、至つて穏和な人ですが、來年

の選挙も亦平和黨の勝利となるに相違ありません、シヨーヴ井ニ

ストは佛國の平和に害がありますから、勢力を得られやうとは思

はれませぬね

夫人は又獨逸にも平和黨の勢力が高まれる事を語り、其他歐洲各國に平和を尊重するの氣風が大に進みたるを説いた

夫人「露國も今回の戦敗で大に覺醒する處があつて、社會的に大革進が行はれ、又政治的にも必ず大進歩を致すでありませしよ

彼女は更に日本を評した

夫人「日本の總ての進歩に感服致しますが、特に社會の徳義の進歩した事を感服して居ます

夫人は立つて一ツの切抜を出した

夫人「これは私が先日新聞から切抜いて置いたのですが日本國民の飲酒高が年々減少してゐる表です

我輩はそれを取つて見て、夫人が如何に日本の事情に注意せるかを

感じた

夫人「日本が露國に勝つたワケです、我が米國の如きはドンな禁酒運動を試みても飲酒の高が殖えて困るのですが、日本は減じて居るので、マア嬉しい事ではありませんか

此話の間夫人の顔には喜悅の色が溢れてゐた、此時忽ちドン／＼と戸を叩く音がした

日本の友人は名譽

荒らゝかに戸を叩くので、夫人は立ち上つて戸を開いたが、客は中に這入つて來ないで室内にある夫人と廊下に立ちながら、何か話して居た

我輩は其間に室内を見廻した、右方の隅ツ所に赤い色のソーファが

有つたが、其赤い色が褪めて、織物の或る部分は破れて居た、室内の物品は總べて古びて、缺けて、破れて、何れも夫人の悲惨な歴史を語つて居るやうに見えた

嗚呼、名望一世に高く、雄辯世界に轟きたるレヅ井ツト夫人が、ドウして此の如き惨憺たる境遇に陥つたので有らうか、我輩は殆ど夢のやうに感じた

男「ソんな事ばかり言つては困まるじやねエか
突然、大きな荒らい聲が入口の所で聞へたので、我輩は覺えず振り返つて見ると、夫人と立話をしてゐた男の聲であつた、夫人は何か頻りに慰諭して居るやうだつたが、男の聲は小さくなつたけれど、尙時々「三十五弗」とか「二十弗」とか言ふ言葉が洩れて聞えた、我輩は之を聞いて夫人が如何に困窮せるかを想ふて、窃かに眉を顰めた

夫人が座に歸へつた時、左の足を引いてゐるのを見た

夫人「失禮致しました

彼の無作法なる來客の爲めに、夫人は少しく激したと見えて、白い頬のあたりに紅潮を呈して居たが、我輩に對する口吻は依然として平和で、其談論は依然として傾聴すべき世界の評論を續けたる後

夫人「私は今は社會に出てゐませんが、新らたに廿世紀の天地に勃興したる日本に多くの友人を持つてゐる事を、窃かに名譽に思つてゐますの

我輩日本に於てはアナタの感化を受けた人が澤山に有ります

夫人は微笑した

夫人「私は巖本善治さんはもとよりよく記憶してゐますが、それから原田助さんはドウしてゐらっしゃいますか

我輩原田君は今神戶教會の牧師です

夫人「私が日本に参つた時通譯の石本さんは亡くなられたさうです

ね、それからアノ……………」

夫人は手を額に當て、考へてゐた

夫人「齡を取るとイケませんね、多くのお友達の名を皆ンな忘れて

仕舞ひましたよ

倒れて怪我

夫人は再び立て柵から、何物かを取り下ろしたが、求むる所の物を
得なかつたと見えて其儘元の所へ收めた、室内が薄暗いのと、我輩
の近眼である爲めに、それ迄は氣が附かなかつたが、夫人が我輩に
脊を向けた時に見るともなしに見ると、其の頭髮は男のやうに散髪

してあつて、鬚は無

左の足が悪いばかりでなく、左の手も悪いと見えて、柵から物を取
り下ろすにも右の手ばかり用ひ、左の手は少しも用ひない
夫人「日本の事を少し書いた物があつたのですが、今一寸見當りま

せん

と言ひつゝ右の手で左の手を撫で、

夫人「此手が利きますと、モツと能く探がすのですが……………」

我輩「ドウかなさいましたか

夫人「ハア痛むので御座います

夫人は右の手を左の肩に當てた

夫人「此の左の肩から手から、コウ腰へかけて左の足まで痛むので
御座います

我輩「ドウしてお痛みになるのですか
夫人「三ヶ月ばかり前に外出しました時、一臺の馬車に出逢ひまし
て、ツイ左の方へ倒れたのですが、それからドウも痛んで困ッ
て居ます

我輩「醫者はドウ申しました

夫人は左の肩を撫でつゝ

夫人「醫者、マア貴君、醫者にかゝれるやうですなら、コンなに苦
勞は致しませんかね

と言つて淋しく笑つた、我輩も夫人の窮して居る事は、此室の光景
で、大概察したけれど怪我をして醫者にもかゝれない程とは思はな
かつた、素より米國の醫者は、日本の醫者と違ふて法外な診察料を
貪ぼるから、貧民が醫者を依頼する事は、非常の困難には相違ない

が、それにしても夫人は何故に此の如き窮境に陥つたか、我輩は暫
らく夫人の顔を見つめるのみで、言ふべき言葉もなかつた、夫人は
我輩が默然として見詰むる顔を見て、暫く無言でゐたが、急に言葉
を改らためて

夫人「初めてお目にかゝつて、コウ言ふ事を申すのも、甚だ失禮か
も知れませぬが、御歸朝の際巖本さんなり原田さんへ、私の歸國
以來の事を傳へて戴きたいと思ひますので、それをお話したいと
思ひます

我輩は熱心に答へた

我輩「是非伺ひたいと思ひます

熱病よりも猛悪な者

我等は貧窮に陥るとも、それは我等に取て必ずしも大した苦痛では
 有るまいが、貧窮に陥る結果として、其の胸中の鬱物を語るに友な
 き境界に陥ることは、随分苦しい事と思ふ、レヅ井ツト夫人の如き
 は今此の最も苦しき境界に陥て居るので有る
 若しも彼女にして相語るべき友を有して居たならば、初めて訪問し
 たる外國人の我輩に、何で其の胸中の秘密を語ることが有らうぞ、
 彼女は今や淋しい、貧しい境界に在て、彼女を慰むる者もないので、
 終に總べての事情を打ち明けて、茫々たる八千里外の日本の親友に
 傳へたいと決意したので有る

レヅ私が二十年前に日本へ參て、多くの人に歡迎されました時は、
 私が生涯忘れることの出来ない、最も嬉れしい時でした、一たび
 日本の地を去ると、モウ不幸は私の頭上に續々と落ちて來ました

夫人の聲はウルんで來た

レヅ「アレから此の國へ歸る途中、亞非利加へ參て禁酒の演説を致
 して居ります内、ヒドい熱病に罹りました

夫人は其の熱病の如何にも酷烈なりし事其の地方の醫師の如何にも
 不完全なりし事、而して九死に一生を得たることを語り

レヅ「ソレからヤツトの事で此の國へ歸りましたが、私が此の國へ
 歸つてから間もなく亞非利加の熱病よりも、モット猛惡なる者に
 襲はれました

我輩は驚いて問ふた

我輩「亞非利加の熱病よりも更らに猛惡な者ですと？」

レヅ「さうです、モット深酷な、モット残忍な、モット厭らしい、ホ
 ントに今想ひ出して、モットとすする様な……」

我輩「マア、何ですか、それは

夫人は冷やかに一笑して、細い、強い、凄いで、タツタ一語を吐いた

レヅ「嫉妬！ (Jealousy)」

夫人の兩眼は此一語を發した時に、異様の光を放つた、荒れ果てた薄暗らい室に、黒い服を着けたる老夫人が、其燃ふるが如き胸中の不平を漏らす發端として、簡單なる一語「嫉妬」と云ふ言葉を吐き出した時に、我輩の一身は慄然としてさながら電氣に打たれたるが如く感じた

恐るべき嫉妬

嫉妬と云ふ一語を吐てから、夫人は暫らく何事をも言ひ出でず、我輩も頭を垂れた儘、暫らく無言で相對して居た考へて見ると、世に嫉妬ほど恐ろしい者はない、歴史上最も恐ろし

い罪惡は、多く個人の嫉妬から胚胎して居る、古來嫉妬の犠牲となつて冤罪に死したる不幸なる英雄才子佳人は殆んど數ふるに違がない美しい一人の佳人の居る所には、ソコに之を嫉む所の百人の醜婦が居る、尊敬すべき一人の秀才の居る所には、ソコに之を嫉む所の百人の凡物が居る

彼等は其の嫉む所の才子佳人を欺くに、種々の手段を用ひ、之を苦しめ之を虐げ、之を不幸なる運命に陥れずんば止まず、かくて其の目的の才子佳人が、不幸なる運命に陥落したるを見て、始めて快よく手を拍て笑ふのは、即ち世の憎むべき凡夫凡婦の常情で有る
基督は嫉妬の爲めに十字架にかけられ、ソクラテスは嫉妬の爲めに毒杯を仰ぎ、ジャンダークは嫉妬の爲めに火刑に處せられ、王昭君は嫉妬の爲めに、胡に送られ、菅原道真も亦嫉妬の爲めに、九州に

逆境に陥れるレヅ井ツト夫人

流竄の身となつた
 世界の罪惡史を一貫せる一大潮流は、即ち嫉妬の潮流にして、世界の多くの罪惡は、此の潮流の上に浮かんで居る
 レヅビット夫人が「亞非利加の熱病よりもモツと酷烈な、モツと残忍な、モツと厭らしい、想ふてもゾツとする様な」と言つたのは、最も良く嫉妬の本質を説明した者で人の子の暗黒なる性質を代表せる最も憎くらしい、最も恐ろしい、又最も淺ましい者で有る、嫉妬の火焰に依つて燃かれたる災禍は、ヴェスヅビアス山の噴火の災害よりも更に深酷にして更らに悲惨で有る、噴火は激烈なれども一時に來る自然の災禍で、之を避けんと欲すれば、随分避け得られないこともないが、嫉妬に至ては遠方から、裏面から、人の氣の附かない所から、徐々に執念深く來るから、如何なる人も之を免れることは出來ない、

見よ、レヅビット夫人が陥れる境遇の如きも、豈人生の一大慘事ではないか、我輩は想ふて此に及んで覺えず、恐れと憎みと悲しみの情に打たれた
 徐ろに首を擧げて夫人を見れば、彼女は深く感慨に沈める者の如く全く兩眼を閉ぢて、一身さながら蠟細工の如くに見えた

嫉妬の權化

夫人は漸くにして話を進めた

レヅ「世界を一週して歸て見ますると米國の禁酒會の情態がスツカリ一變して居ました

夫人の聲は如何にも悲しげに響いた
 レヅ「良い人は争ふて脱會し、惡い人ばかり勢力を得て、跋扈して居ました、それ故に私が歸て來ると、此等の惡い人々が、私が勢

力を得んことを恐れて、力を極めて排斥しました。何れの國にも何れの社會にも嫉妬は有るが、特に嫉妬深い婦人社會に排斥されては堪えられた者ではない。レグ、私が世界を一週する前に、此の働らきを成して歸れば、禁酒會は私に對して地位と報酬とを與へる約束が有つたのですが、私が歸て見ると、唯排斥運動ばかりで、約束は少しも行はれませんでした。夫人は世界を一週する爲めに、多くの金を費やしたが、其の大部分は自分の資産を傾けて、之を支辨したので有つた。故に若し禁酒會が夫人の歸朝後、夫人に相當の地位と報酬とを與へたならば、夫人は尙其の活動を續けることが出来たで有らうが、其の資産を傾けて、世界人類の幸福の爲めに盡して、歸つて忽ち排斥を受けた者だから、殆んど立つ瀬のない人となつたので有る。

レグ、米國の社會は金がなくては一日も立てないと云ふ、淺ましい社會です、私は資産を失ひました、地位も無くなりました、それでも健康の許す限りは社會の爲めに働いて居ましたが、追々健康も衰へまして、終に今日は御覽の通りの境遇に居りますのです。我輩は此の話を聽いて居る中に、不意に一偉人の名を想ひ出して問ひかけた。

我輩、アナタを排斥した嫉妬深い婦人達は、眞に憎むべきで有ります。が、禁酒會長として有名なりしレグサット女史は、何故に其の良からぬ婦人達を制しませんでしたか。夫人の顔はサツと赤くなつたが、極めて靜かに我輩に反問した。レグ、貴君もレグサットを御存知で有りましたか。我輩、面會したことは有りませんが、尊敬すべき立派な婦人、寧ろ

偉大なる貴女として、其の名を記憶して居ります

夫人は我輩の此の言葉を全然否認する者の如く

レヅ「偉大なる貴女などとは、マア誰れがソソなどを教へましたか

我輩………

レヅ「死んだ人の事を彼れ是れ申すのも好ましくありませんが、ウ井

ラード彼女自身こそ

我輩「エツ

レヅ「嫉妬の権化とも申すべき婦人でした

意外なる夫人の言葉に我輩は少からず驚いた、それ迄一代の偉人と

して尊敬して居たウ井ラード嬢を、「嫉妬の権化」と喝破したるレヅ井

ツト夫人の言葉はさながら矢の如く我輩の胸を打った

神の召喚を待つ

吾が久しく敬慕したるレヅ井ツト夫人は有名なる米國禁酒會長ウ井
ラード嬢に依て排斥されたばかりでなく、會員中の良き婦人は、彼女に

レヅ「私が排斥されたばかりでなく、彼の日本へ往て越後で客死したるウエ
依て悉く排斥されました、彼の日本へ往て越後で客死したるウエ

スト嬢も實はウ井ラードが其の才能と器量の衆望を吸引するのを
嫉んで之を幹部から遠ざける爲めに日本へ送くたのであります

夫人は忽ち話頭を一轉して其の一身の不自由を語り出した
レヅ「私も其の後方の及ぶ限りは社會の爲めに働らきました、財

産も無くなり、健康も衰へ、特に地に倒れて怪我をしましてから
は左手を頭の上に揚げる事が出来ませんので、頭髮も切つて仕舞

ひました、齒も抜けましたが社交界に出でない者ですから、入れ
齒も致しません、エレヅビットルに乗りますと、何だか頭がフラ
フラ致しますので、怪我を致さない前迄は、静かに階段を歩ゆん
で外出致しましたが、何しろ九階ですから左の腰を痛めましてか
らはモウそれも出来なくなりました

夫人は左右を見廻はしながら

レヅ「今では此の邊に在る道具を賣て、静かに神の御召喚を待て居
ります

夫人の顔には平和の光が輝いた

レヅ「若しも私が基督を信じ、神を信じて居ませぬならば、私の心
が如何に苦しいでしょう、恐らくは私は憎む所の人を殺すか、然
らずんば煩悶して自殺したかも知れませぬ、幸に私の信仰は私を

救ひました、私は總べて天意を疑ひませぬ

如何に美しき覺悟ぞや、如何に勇ましき胸襟なるよ、夫人はヨブの
如き運命に坐して、ヨブの如き堅固なる信仰を有して居るのだ

話は覺えず長くなつて、室は段々暗らくなつて來た、此の建築のエ
レヅエートルが六時以後は無くなることを聞いた我輩は、名残りは

惜しけれど、急いで暇を告げたが、此のレヅビット夫人の運命は一
方に米國に於ける個人主義の弊、拜金主義の弊、米國婦人の嫉妬の

如何に恐るべきかを説明すると同時に、他方に此の悲惨なる運命を
物ともせず、一糸亂れざるの信仰を以て、静かに神の召喚を待てる

米國婦人の意思の如何に強く其の信仰の如何に堅固なるかを語る者
で我輩は此の僅かに數時間の對話に依て、二十年間敬慕したる此の

老夫人から更らに新たなる多くの教訓を學び得たことを感謝した

第十六 タフト君の宣言

明治三十八年の秋、我輩が米國の中央部を漫遊して、シカゴ市へ入つた時、新聞紙上に、次期の大統領選挙には、何人か其の候補者たる可きやに付て、種々の臆測的記事が現はれて居た。而して其共和黨の候補者たる可き有力なる人物として、時の陸軍卿タフト氏と大藏卿シオウ氏とを挙げ、此の兩氏にして若し次期の大統領選挙に候補者たるの意が有るならば、今日に於て其の任を辭して置く方が、其の聲望を維持する上に於て、大に便利が有るだらうと書いて有つた。或る新聞には此の意味を以て、兩氏は近日其の職を辭するで有らうと記して居た。我が日本に於ても、桂大將が先づ陸軍大臣を辭して置いて、次の内閣組織の準備をなし、而して能く其の目的を達したる

實例を知れる我輩には、直ちに此記事の意味を諒解する事が出来た。されば我輩がワシントン市へ往く迄には、タフト氏もシオウ氏も或は其の任を辭して居りはしまいかと恐れしたが、十月二十三日、米國第一の美しき首府に入りたる時、ルーズヴェルト氏の内閣には、未だ何等の變動も無かつた。

陸軍省の番人

ワシントン市へ着したる翌日、我輩は馬車を陸軍省へ驅て、受附の番人に向て問ふた。

我輩大臣は唯今御登廳なるや

受附「タフト君か、彼れは二階の二百三十一番だ

其の態度と云ひ、語氣と云ひ、大臣を自分の同僚と同一視して居る

風だ、勿論此國に於ては、受附の番人も、大臣も同じく是れ一個の人格として認められるので、英國や日本の如く、受附が叮嚀な言葉遣ひをしないのだ、又全くの門戸開放で、大臣だからと言って、受附が特別の取扱ひをせず、誰れでも直ぐに二階の大臣室へ押しかけることが出来るのだ

大臣室の待合

教へられたる儘に、二百三十一番の前に往くと、入口に書記が控えて居る

我輩大臣に御面會致したいので此の紹介状を持って来ました前元老院議官でタフト氏の舊友なるバトン氏の紹介状を添えて我輩の名刺を出すと言記は受附よりも比較的に鄭重なる言葉で書記此室に於て暫時お待ち下さい

我輩を其の横の一室へ待たせて置いて、紹介状と名刺とを以て奥へ往つたかと思ふと、直ぐに歸て来て

書記他に段々來客が有りますから、暫らくお待ち下さい
成程、此の待合室には既に四五人の先客が待て居る、陸軍大臣は自分面會を求むる者を謝絶する様なことはしないと見えて、我輩の待て居る間にも、次から次へと這入て來た

此待合室は開放

此室にはワシントン以來歴代の陸軍大臣の肖像が懸て居る、田舎者のワシントン見物に來た男女は、自由自在に陸軍省内を見物し此の待合室迄は誰れでもやつて來ることが出来ると思えて待て居る間に案内者が田舎者を連れて此室へ入り來り、流暢なる辯説で説明を始めた

案内者「之れは陸軍大臣の來客が待て居る所です、大臣タフトは此
次ぎの室に居ります、此に懸けて有る油繪は、ワシントンで彼の額
はグランド將軍です」

田舎者の一人は尋ねた

田舎者「アノ隅ッこに懸ッてるのは誰れだかね」

案内者「彼れはダニエル、ラモントです、クリーヴランド内閣の陸軍
大臣を務めた人です」

田舎者「ハ、ア、ラモントていのは彼奴だな、クリーヴランドの秘書官
をハア務めてから、甘まく取り入て出世した抜からねエ男だていの
は彼奴かな、成程、面からして抜からねエだハハハハハ」

高笑ひをしながら出て往く、男ばかりではない女も子供もやつて來
る、それ故に待て居る間も少しも退屈を感じない、其内に先客は入

り代り立ち代り、大臣室へ往て、用を辨じて、サツサと出て往き、遂
に我輩の番になり秘書官が我輩の前に來た

秘書官「ミストル石川、此方へ」

此の待合室の次の室に、秘書官が卓を置いて居る、其の次の室が大臣
室で有る

大兵肥滿のタフト氏

初めてタフト氏に面會したが、其の大きな手で我輩の細小な手をシ
カと握られた時世にも大きな男が有る者かなと感じた
先般日本に於て歓迎を受けた事から、諄々として説き出し、先づ天皇陛
下の高徳及び其の偉業を賞賛し、日本のあらゆる政治家の名を列擧し
て、それ々其の人物の長所を褒めそやし、總べて胸襟を開いたと云ふ

風で、愛嬌溢るゝばかり、面白い話をしては、其の肥大なる身體をユスふる如くにして、アツハアツハと腹の底から聲を出して笑ふた

大統領の候補問題

談話は多岐に涉り、種々の世界的問題に附て意見を交換したる後、我輩は一問を彼れの前に提出した

我輩閣下は次期の大統領選挙に候補となり玉ふ爲めに、今日に於て陸軍大臣を辭し玉ふと云ふことが新聞に現はれて居りますが、アレは事實で御座います

タフト氏は先づ其の膨大なる首を左右に振つたが、左手を延べて、卓上の新聞を取り

タフト之を見て下さい之れに拙者のデクラーレションが載せて有

ります

手に取て見ると、其の文はコウで有つた

I have no intention of resigning from the Cabinet to make a campaign for the Presidency, and, furthermore, I have no intention whatever of making a

campaign for the office of the nation's Chief Executive.

余は大統領ノ競争ヲナサンガ爲メニ、現内閣ヨリ辭スベキ何等ノ意向ヲ有セズ、而シテ尙余ハ國民ノ首長タル地位ニ向テ競争ヲナスベキ何等ノ意向ヲ有セズ

彼れは此の新聞を我輩に示したる後、確かなる聲を以て、儼然として言つた

タフト拙者は出來得る限り、永く現職に留まりたいと云ふ精神で有ります、陸軍大臣として此國民の爲めに盡すべき事業の多いこ

とを感じます、特にバナマとヒリッピンの事は、拙者が現今最も熱心に講究して居る所で、此等の事業を今日に於て手放すとは、拙者の衷情から望まない所で有ります

彼れは其の舊友バトンが我輩を彼れに紹介したる文中、未來の大統領云々の文字あるを笑ひ、バトンは時々此の如き笑談をなす男なりと言ひ、更らに談を轉じて田尻稻次郎氏の事に及び、彼れは曾て大學に於て同級たり、其のイニシアルのT字が同じきを以て、田尻氏の席は彼れの隣に在りたりとて、其の學生時代の事などを語つた

終に大統領となる

大藏大臣シオウ氏は噂の如く次期の選舉に大統領の候補者たるの意ありしや否や、我輩は之を知らないが、我輩が米國を去て歐洲に往

つた頃、彼れが其の任を辭したと云ふ報道を得た、而してタフト氏は其の宣言の如くルーズヴェルト氏の任期の終了する迄、陸軍大臣の椅子に在たが、然るに大統領の地位は、之を求めたるシオウ氏の手に落ちずして、却て數年前に何等のインテンションを有せずと宣言したるタフト氏の有に歸して仕舞ふた

嗚呼、名譽や地位や將た富や之を獲んと欲して逐ふ者の多くは之を獲ず、只其天職を盡すを以て満足し、曾て此等の俗念を有せざる者の上に、却て富貴の榮冠は落下し來るが如し、其後シオウ氏は徒らに排日演説をなして以て米國の民心に投ぜんと務めつゝ有つたが、今では最早や大統領の候補に推さるべき望みはない様だ、之を見ても人の世に處するの道は、必ずしも世俗の打算の如くならざること

第十七 一條公爵夫人と經子姫

或る時田口卯吉君が、欣々として我輩に向て「昨日華族會館へ招かれて講演をしたが、講演の後に館長たる徳川家達公の右席に於て食事を饗應された、之は僕に取ては至大の光榮で、僕の祖先以來未だ曾て受け得ざる所の禮遇で有る」と言はれたことが有る。田口君は舊幕旗下の士であるから、徳川將軍家の右席に坐して、食事を饗應されたことを至大の光榮としたのは、尤もの次第で有る、然るに我輩も亦度々之に類する場合に遭逢したことが有るが、今其の最も著るしい一例に就て話して見ようと思ふ

本野公使夫人の招宴

時は明治三十八年の十一月十七日の事で有る、佛國巴里に於て、時の日本公使本野一郎氏夫人から晚餐の案内を受けた。公使館へ往て見ると此夜の來客は頗る少數で、公使館員某氏の夫人が一名以太利人で有る外、食卓に坐したる十名ばかりは悉く日本人で有った。現に司法省刑事局長をして居る小山温君も、亦來客の一人で有ったが、いよゝゝ食卓に着いて見ると、本野公使夫人と、一條公爵夫人が相對して中央に坐を占め、小山君の席は一條公爵夫人の右で、我輩の席は其の左方で有った。主人たる本野公使夫人の右には、當時公使館附武官で有った一條公爵が坐を占められたが之れが宛かも我輩と相對する人で有った、而して我輩の左方には、一條公爵の令嬢つね子姫が坐せられた、我輩は生れて以來コンなに恐縮したことは無い前には公爵、右に公爵夫人、左に姫君と云ふのだから、マルで一條

公爵家の一家族に取圍まれたので有る、言ふも畏し、五攝家の一なる一條公爵と相對して坐するさへ昔ならば得難きことなるに、知んや公爵夫人と姫君が左右に坐し玉ふをや、流石に大膽不敵なる我輩も、此時ばかりは一身の縮まることを覺えた

公爵夫人「貴君は御郷里はドチラで居らっしゃいますか

我輩「備前岡山で御座います

公爵夫人「オヤ岡山藩で居らっしゃいますか、マアそれでは今度私の實家と池田さんと御縁を結ぶことになりましたから、何分宜しく願ひます

我が舊藩主池田侯爵家と夫人の御實家なる細川侯爵家との間に、御縁が出来たと云ふので、舊臣の一人たる我輩へ此の如き御叮嚀なる御挨拶で、誠に恐れ入って仕舞ふた、それから我輩が知を辱ふしたる

長岡子爵の事やら、熊本へ遊歴した時の事など話し出して、水前寺の公園や江津湖の奇麗な水は暫らく卓上の話題となつた

日本料理の御馳走

此の夜の御馳走は純粹の日本料理で、日本酒の燗をした徳利が卓上に置かれて居た、スルト話の間に、公爵夫人は其の徳利を取り上げ

公爵夫人「お一トツ、如何で御座います

我輩「之れは恐れ入ります

誠に恐れ入つた次第だが、此場合に於て、之を辭退するは却て失禮なりと考へたので、膽力を据えて酒杯を取り上げ

我輩「至て不調法で御座いますから、ドウゾ少々ばかり
公爵夫人「マアお一トツお過ぎし遊ばせな

とナミく注がれた、公爵夫人は更らに小山君の方へ徳利を向けられると、小山君は之を受けながら一代の名言を發した

小山「アナタのお酌では、ドウモ酒が咽喉へ詰まります

公爵夫人「アラマア、どうしてでしょう

小山「手酌の方が却て氣樂で宜しう御座います

我輩は此時覺えず私も同感です」と云ふと、公爵夫人は微笑を含ませながら

公爵夫人「スツカリ嫌はれて仕舞ひましたね

と徳利を置かれた、一座は大に笑ふた、話は又一トしきりはづんだ、此の日本野公使は近郊へ狩りに出かけたと云ふので、狩獵の事やら犬の事などが話題となつて大分面白い話が出た

經子姫の「お酌」

公爵夫人のお酌を賜はつた酒杯なれば無限の敬意を以て少しづゝ之を傾け、漸くにして之を終つた頃、突然左方から

つれ子姫「お酌！」

簡單明瞭に「お酌」と云ふ聲が聞えた、振り返えれば、姫君が他の徳利を以て我輩へお酌を賜はると云ふので有る、此の瞬間に不圖想ひ起したのは、此の姫の御上の事で有る、過ぐる年宮中に於て、皇太子殿下へ御立妃御撰擇の御評定ありける折柄、此の一條家の經子姫こそ御年と云ひ御器量と云ひ御才徳と云ひ、正さしく皇太子妃殿下とならせ玉ふべき御方なりとの意見、其の筋の大官の間に高かりしに畏くも皇后陛下の御説として「二代相續て國母を一條家より出さんこと

然る可らず、此度は皇太后陛下の出で玉へる九條家よりこそと有りければ、終に評定之れに一決して、九條家より現今の妃殿下の出で玉ひしとは、我輩が其の當時親しく其の筋の大官より承りし所である、かゝる高貴の姫君より御酌を賜はると一身の光榮此上あるべからず、さりながら又勿體なしと考へては、總身さながら水を浴びたるか如くに感じた

我輩の席が最上

此夜公使夫人の快活なる應待振りに、すべての客は満足して公爵夫人も姫君もいと打ち解けたる御とりなしにて、巴里の花弁の事やらオペラの話やら、音楽の批評など、さまざまの御物語、心をきなく遊ばされしが、やがて時來て小山君と共に公使館を出で、同じ馬車にてシヤンゼリゼイに向つた、有名なる凱旋門のほとり坦々たる大

道を馬蹄ゆるやかに驅れるの時、酔ひを發したる小山君は、醉眼を見開らきながら、我輩の肩をトンと叩いた

小山「今夜の席順から言へば、僕の方が上席だが、實際は君の方が上席で有つたね

我輩ソウだ、我輩は非常な幸福で有つたが、君の右方は誰で有つたか

小山「公使館員の細君だと云ふ、アノ以太利人の夫人さ
曾て外國に於て大統領や皇帝に謁見した場合に於ても、格別に榮譽なりとも思はず、全く平氣で居た我輩も、此の夜計りは又と得難き至大の光榮を得たりと感じた、曾て如何なる貴婦人令嬢と握手しても、何等特殊の感に打たれなかつた我輩も、此の夜ばかりは全く心臓の鼓動を覺えて終生忘るべからざるの深き印象を得た

第十八 埃及に於て伊藤博邦君の活劇

千九百五年十二月二十五日を以て、佛國マルセイユ港を出發したる我輩は身をビー、オー會社のデルヒ號に托して、走ることに正に五日、第一の夜は英雄ナポレオンを生みたるコルシカ島の傍を過ぎ、第二の夜は有名なる伊太利の噴火山を望見し、第四の日は右舷に突兀たるクリート島を見て、地中海の空氣を充分に呼吸し、第五の日の午後三時半、遂に埃及國ポートサイド港に到着した。倫敦若くは巴里を見たる眼を以て、マルセイユに來ると、既に多少輕蔑の念を起さざるを得ないが、それから僅かに五日にして、ポートサイドに來た者だから、不潔の臭氣は著るしく鼻を打ち、滑稽な

る風俗は甚しく眼に著いて、モウ此邊から東洋の野蠻の風が吹いてゐるのかと一種悲愴の感に打たれた

我輩は此港にデルヒ號を捨て、更らに倫敦より來るバラロング號を待つ豫定で有つたから、荷物を整えて上陸の用意をした、ホテル、コンチネンタルと云ふ文字入の帽子を冠つた土人と英人との合の子らしい若者が來たから之に荷物を托して我輩は獨り上陸すると同じホテルの案内者が我輩を役人の前に連れて往つた、東洋野蠻の風習は、此役人の傲然たる態度口吻にも現はれた、役人は少し小高い所へ机を置き、中央には能く肥えた色の白い男が傲然と座を構へ、其左右に三四人の白人や混血兒の小役人が控へてゐる。案内者が我輩を其机の前へ連れて往くと、中央の肥大なる役人がイヤに氣取つて鼻眼鏡の上から瞰下ろし、極めて横柄なる口吻で問ひ

かけた

役人「其方は旅行券を持つてゐるか

我輩は露國に赴くの外世界に旅行券の必要が有ることを思はないから、勿論之を携へてゐない

我輩「ソんな者は持たない

先方が如何にも傲然たる鼻息で來たから、此方も随分傲慢なる態度で答へて遣つた

役人「然らば尋ねることがある

我輩「何だ

役人「何と言ふ國の人間で何の種族か

國ばかりなら兎に角種族迄を問ふとは餘り失敬だから、我輩は直ぐに答へなかつた

我輩「己れをドコの人間で何の種族と思ふか

役人「土耳其人か、スペイン人か、葡萄牙人か、希臘人か、將た伊

太利人か……………

我輩「否

役人「それではヒリビノか

我輩の風采甚だ揚がらずと雖も、野蠻なる亡國のヒリビノ人と言はれては憤慨せざるを得ない、乃ち怒れる兩眼に「問答無益」と言ふ意味を示して、役人の前を去らうとする時に、小役人の一人が、急に肥大なる役人に囁やいた

小役人「長官、彼れは日本人ですぜ

彼の肥大なる男は、急に驚いた様な顔をして我輩を追ひかけて引留めた

役人「貴下は武勇世界に隠れなき日本の紳士でゐらせらるるか
先刻からの無禮の段は平に〜と云ふ態度で、コウ言つたから、我
輩も言葉を変更して答へた

我輩さうです

役人は手早く一葉の紙片を取り出した

役人「御手数甚だ恐縮ですが、之れへ御姓名と国籍とを……………」

我輩はポケットから一葉の名刺を出して彼に渡すと、彼は大に喜ん
だやうな風をして之を眺めた

役人「イヤ是れは珍らしい御名刺で、之を公用致した後は、拙者が
記念として永く保存致したいと存じます

日本人と氣が附いてから急に役人の態度の一變したのを見て、我輩
は如何にも不思議に思ふたが、後で考へると之れには大にワケの有

るで事あつた

伊藤萬歳の叫聲

馬車のホテル、コンチネンタルに着いた時、案内者が逸早く我輩を日本
人なりと報告してゐたと見えて、支配人は我輩を歓迎して最上の一
室を與へた

ホテル、コンチネンタルは恰も東京の帝國ホテル位の者で、總べての
規模が能く似てゐる、^三が狭少で裝飾も器具も良い物を用ひて居な
い、料理は佛國から料理人を雇ふて巴里的の料理だと云ふ廣告であ
るが、矢張帝國ホテルの如く餘まり甘まかない物を幾皿も食はせる
但しパンは流石に佛人だ、帝國ホテルでは食へない佳いパンで、パ
タも巴里で用ひるやうな良いのを用ひてゐた、カイロフ府へ往つて

見ようと思つたが、エジエントに聞くとバラロング號は多分明日の午後入港するだらうと云ふので此地で之を待つことにした。何のする事も無い者だから、先づ馬車を驅つて、アラビヤ人の部落を一巡して見た、曾て朝鮮の臭氣に避易したる我輩は又此アラビヤ人の臭氣に避易した、ドウして野蠻人はコンな不潔なので有らうか、コンなに臭氣を放つので有らうか、又此の不潔なる生活に堪え得るので有らうか、我輩が此等の疑問を心の中に描きながら部落を縦横に驅つてゐると、或る街區の角から子供の一群が現はれた

甲「ヤア日本人が來た

乙「伊藤萬歳!!!

十五六人の子供が此音頭に連れて一時に聲を揃えて伊藤萬歳を唱へながら、バラ〜と馬車の前後を取り巻いた

丙「一文呉れエ

甲「オイ伊藤の日本人、一文お呉れよ

口々に罵る小供をシツ〜と追ひ拂ふてゐた馬丁は、遂に鞭を擧げてピツシリと前列にある小供を打拂ひ、馬の歩みを早めて進んだ、小供は此一鞭を受けて、遙かの後方に退いたが、尙盛に聲を擧げて伊藤萬歳!!!を叫んでゐた

我輩は之を聞いて甚だ不思議に感じた、米國でも歐洲でも到る處の小供や労働者が我等日本人を見て「東郷萬歳」と叫ぶのは珍らしくないが、伊藤萬歳とは近頃不思議な叫聲で有る

イトウとは果して誰れを意味するか、伊藤侯爵で有らうか、伊東海軍大將で有らうか、又は伊東已代治男で有らうか、何しろ之れには仔細の有る事で有らうと思ふて、先づ馬丁に聞いて見た

我輩「アノ小供が、伊藤萬歳と言つたのはドウ云ふワケだ
馬丁「伊藤萬歳、へッへ、大丈夫、私も知つてゐます、伊藤ていの
は日本の貴族の名でしよう、それから萬歳ていののは……………
彼は我輩に試験をされた積で、へッへと笑ひ乍ら答へたが、其答は
要領を得ず、特に萬歳の意味迄は知らなかつた

防波堤上の散歩

世界の港灣で、ボートサイド港の如く詰らない所はあるまい、旅客
が見物して其心を慰むべき何等の設備もない、仕方がないから晩景
から杖を引いて海岸に出でた
サハラの大砂漠から打續いたる亞非利加の砂の上に立つて、地中海
に對して大呼吸を遣つた、我輩の吐き出す此の大きな息氣が果して

此の渺慢たる地中海を越へて對岸の歐洲諸國迄達するで有らうか何
うかと思つて、ウツトリとしてゐる處へ、ブーンと佳い香が鼻を打
つたので、覺えず振り返ると、三人の人が我輩の背後を過ぎて、
歩調を揃へて彼方に歩んでゐる
三人の人の中央は、能く肥えた男で、大きな靴をドサリ／＼と確か
に歩んでゐる、右方は橄欖色の衣服を着けた婦人で、左方は桃色の
派手な衣服を着た若い婦人で有る、彼等は今晚餐の前の散歩をして
ゐるので、何事かを語りつゝ、歩調を揃えて進んでゐる、我輩は其
行方を目送して居ると、海中に突出した防波堤の方へ向つた
長い防波堤の中央には、スエヅ運河の大業を成功したるフェルチナン、
ド、レセツプの銅像が立つてゐる、然り此防波堤は此の無趣味なる亞非
利加の一港に於ける唯一の散歩場で有る、我輩も乃ち徐ろに其方に向

て歩み始めた

我輩が種々の空想を描きつゝ、ブラリ〜と防波堤の七八間も歩んだ頃、彼の歩調を揃えた紳士と貴婦人は既にレセツプの銅像の所に達してゐた

銅像の近傍には、彼の三人の外に、尙幾組も貴女紳士が手を取り合ふて散歩してゐたが、其中の一組は早や歸途に就くべく此方に向つて来た、近づくに従つて、其紳士が手を舉げて我輩を呼びかけた

紳士「ハロー〜」

フィと氣が附いて見ると、デルヒ號に於て五日間食卓を同ふした英國紳士ブルツク氏と其夫人で有る

我輩「オヤ君は四時の特別列車で、カイロフ府へ赴かれたかと思つたら、未だ此地に居られたか

夫人は一笑して

夫人「伊太利のプリンヂシから便船を取つた友人が、明朝此地へ來ますので、それで待つてゐますの

話の中へ、彼の三人組の人も歸つて來た、ブルツク氏は此三人組の人を知てゐて、直に我輩に紹介した

「之れは獨逸の埃及學者で、ウヰルダヘン氏と申し、ソレなるは氏の夫人と令嬢です

ウヰルダヘン氏は肥大な體軀で、赤い顔の太い聲で、強いアクセントの英語で話しかけたから、我輩も挨拶をした

我輩「埃及の研究には、我輩も大に興味を有し、ラムセス二世の頃迄は日本に於て書物で研究しました、貴國のレブシアスの著書は特に面白く讀みました

ウ「何と言はれる、レプシアスの著書を読まれたとか、それは大に話せる

彼が興に乗じて、頻りに埃及學の講義を始めた時、ウヰルダヘン嬢が不意に我輩に問ひかけた

ウ嬢「貴下は日本の伊藤さんと云ふ方を御存知ですか

我輩「伊藤と言ふ姓は、随分澤山ありますが、元老の一人伊藤ですか、植物學者の伊藤圭介ですか、又は海軍大將の伊東ですか

ウ嬢「アノ未だ若い、随分奇麗な伊藤さんですよ

ハテ誰れであらう、若い奇麗な伊藤さんと言ふのは、或は伯林あたりの留學生の中に伊藤姓を名乗る者でもあるのか

我輩「侯爵も、大將も、年を取つてゐて、奇麗とは行きませんが、誰れでしやう、書生ですか

ウヰルダヘン夫人が確な聲で、之を否認した

夫人「イエ決して、書生さんなんかでは有りません、立派な方です折角埃及學の講義を續けんとして、鼻を折れたウ氏が説明を加へた

ウ「それは何です、アノ貴國の皇族有栖川宮の隨行員の事です、イヤ家内や娘共は、常にあの人の事ばかり申してゐるので……ハ

ツハ、ハツハ

有栖川宮の隨員の伊藤と言へば、擬ふ方もなき別當伊藤博邦君の事に相違ない、我輩は昨日も伊藤萬歳の聲を聞いて不思議に思つてゐた處だから、之を聞いてハツと氣が附いた

知らんでは濟まない

倫敦でも巴里でも外套を脱する事の出来ない十二月下旬に、マルセ

イユでは既に外套がなくて外に出ることが出来た、ポートサイドに至つては愈々暖かで、晩景には防波堤の上で、吹き来る海風を受けるのは、誠に心地が好い、特に此の風は亞細亞と歐羅巴と亞非利加の三大陸の空気が直接に交換する風だと思ふと、防波堤上に立つて、我一身は東半球の最高所に立てるが如くに感じた

然り、少なくとも一代の英雄彼のレセツプは、東半球の交通に大革命を興へ、三大陸の文明史に一新紀元を開いた男だから此最高地に立つて三大陸を睥睨し、永く此半球の王を以つて自任するの資格ある者である、而して我輩は東半球の王とも謂ふべきレセツプの銅像を睨みつゝ、端なくも獨逸人の口から我が伊藤博邦君の噂を聞いた

ウヰルダヘン氏は太い強い聲で

「家内や娘共が、伊藤君の事を毎日噂致してゐるのは忘るべから

ざる大活劇を目前に見せられたので……

我輩忘るべからざる大活劇とはドンな事ですか

「イヤそれは一度見た者の決して忘れる事の出来ない活劇で……

令嬢が細い聲で形容詞を付け加へた

令嬢「勇ましい、強い、男らしい……」

我輩「それは勿論伯林の事ではやうね

令嬢「イ、エ此のポートサイドなの

我輩「ポートサイドに於て伊藤博邦君の大活劇……」

令嬢「ハア勇ましい、男らしい

我輩「それは何時でした、それからドンな機會でしたか

夫人が語を挟んだ

夫人「アナタ御存知なくツて

我輩「チツトモ知りません

令嬢が急ぎ込んだ

令嬢「日本の方で、アレを知らないと言ふ法はないワ、日本の新聞な

ンか、アノ大事件を報導しないと云ふ法はないワ

ブルツク夫人が笑ひ出した

「夫人「オホ……………大變な事件ね、私も知らないのですが、マア、

一體どんなこと

令嬢「アナタも英國人の癖に何んですね、同盟國の日本の紳士の此

勇しい大事件を知らないなんて、マアホントに濟まないワケよ

「夫人「御免下さい、だツて未だチツトモ知らないのですから……………

「ナニそんな大した事件でも無いけれど、一寸獨逸式を遣つたの

で、我輩にも氣に入つたのさ

我等は歩み乍ら話してゐる中に、レセツブの銅像に達した歸途に就

かんとせし彼等は再び我輩と共に銅像の所へ來た、而して伊藤君の

勇しい活劇は、彼の熱心なる崇拜者たる獨逸美人の新しい唇より描

くが如く語り出された

埃及官吏を打つ

ウヰルダヘン嬢は華やかな帽子の下から、涼しい眼を見張つて語り

出した

「有栖川の宮が日本へお歸りの途中、此のポートサイドへ一寸

御上陸になつた事があります

我輩「それは獨逸皇太子の結婚式へ日本を代表して赴かせられた、

其お歸りの時でしよ

嬢は首肯きつゝ

ウ嬢「屹度さうでしよ。私は友人が其船で埃及へ來ましたのを、兩親と共に迎へに船まで参りましたの

我輩ハ、ア

ウ嬢「私が其友人と共に上陸して税關の役人の前へ往きました時、

丁度伊藤さんの活劇を見たのです

嬢の兩眼は星の如くに輝き始めた

ウ嬢「税關の役人が有栖川宮殿下のお手荷物に手をかけて之を改め

ようとしたのです

ブルツク夫人が叫び出した

ア夫人「マア何と言ふ無禮でしやう

ウ嬢「隨行員の中の人々が之は日本の皇族であると説明してやりました。アノ肥大な、傲慢な憎らしい役人が頑として聞かないで、聲を勵まして、「其の手荷物を開け」と命令しました

ブルツク氏は眉を擡めて

ア氏「壓制で開きましたか

ウ嬢「其時に少し遅れて來た、アノ伊藤さんが隨行員の話の聞くや否や、進み出て、彼の傲慢なる役人に向つて「貴官は是非此の手荷物を開かんとせらるゝか」と聲を掛けられました

ア氏「成程

ウ嬢「役人は其の質問を見向きもせず躊躇してゐる下役人に向つて「ナゼ速かに開かぬか」と叱咤しました

ア夫人「マア

ウ井ルダヘン嬢は拳を上げて男のやうな身振をし出した

ウ嬢伊藤さんは嚇と怒つて、イキナリ拳を上げて彼の傲慢な役人の右の頬をボカ〜とコウ言ふ風に………

ア夫人「マア危ぶない、御免なさい私は埃及の役人ではない事よ

ウ井ルダヘン嬢が熱心の餘りブルツク夫人を打たんとしたので、一同大いに笑ふたが我輩は獨り眞面目に問ふた

我輩「打ツたのですか

ア嬢「打ツたのです、ホントに氣味のよい程打ッてよ、だから私達覺

えず喝采しました

伊藤博邦君の大活劇とは、此事で有ツた、左るにても其結果は如何になつたか、我輩はセキ込んで問ふた

鐵拳は良心の警鐘

ブルツク氏は悵然として語り出した

ア氏「埃及の官吏が、傲慢無禮なるは誠に嘆息すべき事であるが、是れは獨り埃及のみでない、印度でも南亞非利加でも緬甸でも、

支那でも、殖民地全體の通弊で有ります

彼は哲學者の如き口吻を以て之れには二個の原因がある事を説き出した

ア氏「これには二個の原因があります、一は社會的制裁が無いからです、凡そ人に侮られる國民は自ら侮る國民です、埃及の官吏の傲慢無禮は國民が其の無禮を許して置く結果です、社會的制裁の嚴しい本國に於ては、決して此くの如き傲慢無禮を働く事は出來

ない、國民が之れを許しませぬ、二には此の傲慢無禮が執務の上
に便利なからです、東洋の愚昧なる人民を統御するには威力の壓
制が必要で、之れに據つて事務が大に便利に成るからです
ブルツク夫人とウヰルダヘン夫人は此ブルツク氏の意見を聞いて、
憤然として、役人が便宜の爲めに傲慢の態度を取る事を、大に非難
し、東洋諸國に有る白人の墮落を痛撃して止まなかつたが、我輩は
それよりも本題たる伊藤鐵拳問題の成行を聞かんことを求めた
我輩、それで伊藤君が打つた結果は、ドウ成りましたか
ウヰルダヘン氏は快調に笑ひながら
「埃及官吏も怒つた事は怒つたが、日本人の烈しい見幕に皆恐れ
入つて仕舞つた
夫人は附け加へた

夫人「伊藤さんの外に、立派な海軍士官がゐられました
我輩「それは多分佐官の大澤喜七郎君でしたらふ
夫人「然うですか、伊藤さんと此海軍士官と外に四五名の随行員が皆
恐しい見幕で、若し殿下の御手荷物を開く者が有つたら、即座に斬殺
すと言ふ勢を示された者ですから、傲慢なる埃及官吏も遂に青くな
つて了ひました

令嬢が嘲ける如くに言つた

「ウ、最初は傲慢であつた埃及の役人が、伊藤さんの鐵拳を受けてか
ら、皆青くなつて、御手荷物は改めませんからドウか其儘お引取り下
さい」と言つた醜態たらなくつてよ

ブルツク氏が又哲學的口吻を用ひた

「ア、伊藤君の鐵拳は埃及官吏の良心を喚起する警鐘であつたね

ウ 聖「ホントにさふなのよ、アレから少しの間税關の役人が叮嚀になつたと云ふことよ

太い聲でウ井ルダヘン氏が言つた

ウ 氏「又此頃イケないさうだよ

是に於て我輩は我輩が上陸の時の情態を想ひ出し、日本人と氣が附くや否や、役人の態度の一變したる理由を悟る事を得た

獨逸皇帝論

日は段々西の方へ沈んだ、地中海に於ける波上の一線は赤く成て來た談話に時を費し過したる我等は、晚餐の時を失ふ可らずとて、徐ろに歸途に向つたがウ井ルダヘン嬢は其途中に尙繰返して日本人の勇武を賞識し、伊藤君の勇しき活劇の如きは、其の氣象の如何に獨

逸的なるかを説きたる末不意に我輩に向つて一問を發した

ウ 聖「日本人と獨逸人はコンなに氣象が似てゐるのに、ドウして日

本人は獨逸人を嫌ふのでしやうか

我輩「オヤ伊藤君が貴嬢を嫌つたと仰有るのですか

ウ 井ルダヘン嬢は顔をサツと赤くした

ウ 嬢「アラ貴君はお人が悪いことよ、私は未だ伊藤さんと御交際を

得てゐないのです者を

我輩「これは失禮でした

ウ 聖「私は一般に日本人と獨逸人と仲の善くない事を悲んでゐます

の

ブルツク氏が冷やかに斷案を下した

ア「それは獨逸が悪いからさ

ウキルダヘン氏が更らに註釋をした

ウ「獨乙が悪いのではない、皇帝ウキルヘルムが悪いのだ

ウキルダヘン氏は南方獨乙の人で、現皇帝ウキルヘルムには反對の意向を有してゐると見えて、冷罵の口吻を洩らした

ウ「今や皇帝ウキルヘルムのマキャベリズムは全く失敗に歸した、彼の狡猾なる政治方針は、世界の憎惡を買ふの外、何等の効も無かつた

ズ「さうだ、日清戦争にも露佛を煽動し、日本を苦しめ、次で膠州灣を奪ひ、西米戦争には南洋の群島を盗み、南阿戦争に於ても或る者を盗まんとして、クルーゲルを煽動し、日露戦争で露國の弱く成れるに乘じ、モロツコへ手を出した、彼れは世界の混雜に乗じて悪事を働く所の世界的盜賊である

ウ「けれども今や彼は全く失敗して、世界の同情を失ひ、殆ど孤立

の人となつた

我輩も亦附け加へた

我輩獨逸皇帝ウキルヘルムは、ナポレオン三世だと我輩は思ふて居ますが、ドウでしょう

フ氏「確かにさうです、彼れの末路も必ずナポレオン三世のそれの如く大失敗を見るに相違ない

談話が途方もない所迄進んだので、ウキルダヘン嬢は之を引戻すべく努めた

ウ氏「それでは日本人は十年前の三國干涉の怨みを忘れないで、それで今以て獨逸人を嫌ふのですか
ブルツク氏が答へた

「ナアニそればかりでない、最も甚しいのは獨逸皇帝が日本の皇族の一人を殺したと言ふ話もある
 我輩は之を聞いて痛く驚いた、若しもそれが架空の風説にしてもマア途方もない風説だと思ふたから、更に進んで聞かうとした時に、偶々一輛の馬車が我等の横を過ぎ、車人の一美人がブルツク氏に向つて、ハローと聲をかけた

間接的殺人犯

馬車の中なる美人は米國婦人サンキイ嬢と稱し、矢張りデルヒ號乗客の一人で、明朝カイロフ府へ赴く人で有つた、是に於てブルツク氏夫妻とウヰルダヘン氏夫妻及び其令嬢とサンキイ嬢と我輩と、七人でホテル、コンチネンタルの食堂に入つた

サンキイ嬢は此市街にある回々教の會堂を見て來たと云ふので、其内部やら構造やら僧侶から聞いた、種々の儀式等を詳かに説き出して、暫くの間一人で食卓上の談話權を專有してゐた
 我輩は或る機會を以て、ブルツク氏に向つて獨逸皇帝が日本皇族を殺したと言ふ風説に付いて聞かふと思つたが食堂には幾多の人がゐると、サンキイ嬢が餘りに多く話すので、遂に問を發し得なかつた、而してサンキイ嬢は其回々教の話を終ると、更らに我輩に向つて問ひかけた

サ嬢、貴君は此のボートサイドに日本人のゐることを御存知ですか
 我輩、知りません
 サ嬢、マアそうですか、私は先刻ソコのヒヨロザンテと云ふ伊太利人の店で三人の日本人を見ました

ウ井ルダヘン嬢が説明的に言葉を挟んだ

ウ嬢「此のポートサイドばかりでなく日本人はカイロウ府にもゐることよ

我輩「カイロウ府にも……………」

ウ嬢「ハア日本人は埃及には大變に勢力が有ります

ブルツク氏は例の哲學的眼光を以て觀察した所を説いた

ア氏「此の市街をヅラリと一巡したばかりでも、日本人の勢力が、

如何に埃及に及べるかを知る事が出来る

我輩「ドウ言ふ意味でソウ言ふ事を言はれるか、我輩にはサツバリ

分りません

ア氏でも總ての商店の店頭に在る者は大部分日本からの輸入品で

はありませんか

かゝる談話の中に、食事を了つて廊下に出た、我輩の傍にブルツク

氏が来たから、我輩は小さい聲で問ふた

我輩「君は先刻獨逸皇帝が日本の皇族を殺したと言ふ、容易ならざ

る風説を語られたが、アレは果して歐州に於て行はれてゐるので

すか

ブルツク氏は笑ひ出した

「ナニ敢て殺したと言ふワケではないが、先づ殺した様な者だと

言ふ説で、哲學的に言へば間接的殺人で、敢て法律上の犯罪と言

ふ譯ではありません

我輩は熱心に問ふた

我輩「間接的殺人でも何でも宜しいが、何かソんな事實が有つたの

ですか

「オヤ君は未だアノ一件を御存知ないのですか

我輩「ドウ言ふ事件ですか

ブルツク氏はマツチでシガアへ火を附け、やをら其の所謂獨逸皇帝の間接的殺人犯を説き出した

獨逸皇帝と小松宮殿下

日本人は何故に獨逸人を嫌忌するか、之れには種々の原因が有らうが、ブルツク氏は之を説明するに一の容易ならざる風説を應用した
ア氏「日本の皇族の中に小松宮殿下と申すお方が有りましたでしょう我輩有りました
ア氏「我が英國の皇室に於て最も尊敬し、最も親愛したるお方で、現皇帝エドワード七世の如きは、殿下を以て無二の友人と思ひ給

ひたる事を承り及んでゐます

我輩「天資英邁にましまして、維新の改革にも御功績あり、其後貴國へ御遊學にて世界の大勢に通じさせ玉ひ、御歸朝の後も、重き任務に就かせ玉ひ、日清の戦役には、大總督として滿洲へ御出陣あり、我々天皇陛下に於かせられても、誠に我國の柱石と頼ませ玉ひし御方であります

ブルツク氏はシガアの灰をハタと落して

「其の小松宮殿下が、我々エドワード七世陛下の戴冠式に、日本を代表して英國に参られたることは、勿論御記憶でありませう

我輩「さうです、確に覚えてゐます

「倫敦から伯林へ赴かせられた事も御承知でしょう

我輩「知つてゐます

ブルツク氏は笑ひ出した

「ソレを御承知なら、モウ申す事は有りません

我輩イヤそればかりでは、間接的殺人犯問題が、未だ明瞭になり

ません、それからドウしたのですか

ブルツク氏は鋭い響を發する小さい聲で言つた

「殿下が倫敦を出發せられたと云ふ電報が、伯林に發表された日

に、突然皇帝ウヰルヘルムが旅行をして、殿下が伯林に赴かれた

時、之を歓迎すべき皇帝は伯林に居りませんでした

我輩、そうでしたか

「大侮辱では有りませんか

我輩、失敬ですわ

「大無禮では有りませんか

大無禮、大侮辱と言ふ聲が、新聞を讀んでゐたウヰルダヘン氏の耳

に這入つたので、彼は太い聲で言つた

「ブルツク君、何が大無禮で何が大侮辱か

「カイゼル、ウヰルヘルムが日本の皇族を冷遇した一件さ

「ハツハ、彼れのする事は、何んでもア、なんだよ

済ましてコウ言つた後、讀みかけた新聞を膝の上に置いて、我輩に向

つて挨拶をした

「お氣の毒な事には、日本の皇族にはアレから歸國の後、此の侮

辱を憤られて間もなく憤死せられたと云ふでは有りませんか

聞けば聞く程、意外なる風説に、我輩は啞然として呆れて仕舞ふた、

第十九 三島彌太郎子と江藤新作君

明治三十九年の一月、我輩は歐州からの歸途、香港に於て子爵末松謙澄先生に邂逅した。我輩が埃及から乗つた英國船は印度洋や支那海に於て機關に損所を生じ、洋中に於て修繕を加ふる爲めに、豫定よりも大に遅くれたので、歐州を出發する時は先生よりも遙かに先きで有つたが、香港に於て先生を載せたる快速なる獨逸船に追ひ附かれたので有る、我輩が三井物産會社の社宅で支店長南新吾君と話を居ると、「末松さんの御一行を載せた獨逸船が入港しました」と云ふ報告が來て、それから其の翌日は早天から先生と共に香港市内を見物したが、此の見物の一行には先生と同船して歐州から歸つた高楠順次郎君、大阪商船會社の堀君等も加はつた、案内者として香

港在留の日本紳士が三四名一所に出かけた、先づ有名なるケーブル、カアでビークに上ばつた、其の終點で下車し、徒歩して峯の絶頂に上ばり、港の内外を一眸の中に收むる所へ達して、眺望を恣まにしたが、良い風景で有つた、正午には香港の知事が先生だけを午餐に案内し、高楠君、堀君及び我輩共は野間領事の客となつて日本俱樂部で午餐を饗應せられた、先生は知事官邸の午餐を終つて、直ちに日本俱樂部へ來り、午後も亦一所に市内見物に出かけたが、此の間に種々の事が話題となつた、末松先生が歐州の田舎へ入つて、種々の珍らしい古畫を掘り出された事や、獨逸船が一行を待遇するに其の道を失ひ、先生が激怒して一書を發し、それが一問題となつた事など、重なる話題で有つた、而してビークの絶頂から降下して、午餐迄の間、美しい花卉に富める公園に休憩した時、先生は我輩に

向て一問題を提出された

末松君は好んで人物評を試みたが、セコンド、ゼネレーションの間に有爲な人材が有るかね

當時世の評判になつて居た竹越與三郎、望月小太郎、松本君平、小手川豊次郎等の諸君は、何づれも先生の眼に映じたるセコンド、ゼネレーションの俊才で何づれも既に先生から間接直接に恩顧を受けたり人々で有るから、我輩は先生の此の問ひに對して是等の俊才を紹介するの必要はなかつた、ソコデ我輩の答はコウで有つた

我輩恐らくは先生などがお氣が附いて居るまいと思ふ二個の人物を、我輩は將來國家に有用なる人材として目を着けて居ります

末松「ハ、ア、それは誰れか

我輩一人は貴族院議員で一人は衆議院議員で有ります

末松先生はハテナと小首を傾げて居られたが、ドウモ格別思ひ當らるゝ所もなかつた

江藤新作君

我輩が先生の此の問ひに答へて、推擧したる人物は、第一に當時衆議院の一員たりし江藤新作君で有つた

我輩江藤は未だ十分に世間に知られて居らず、其の勢力も別に現はれて居りませんが、人物は實に立派な者で有ります、昨年夏五十日間、同じ滿洲丸で一所に生活致しましたが、彼れの胸中は一切の私事を有せず、日夕唯國事を思ふて居る様に見えました、コウ云ふ立派な人物は先輩の間にも餘り多く其の例を見ませんが、將來國家を托すべき有爲の人物なりと思ひました

末松江藤新作とは新平の息子だね
 我輩ソウです、江藤新平が維新前に窮して食ふ物のない時にも、
 矢張り天下の形勢に付て考へて居て、空腹になると良い智恵が出
 でると言つた話は有名な者ですが、其の面目は全く此の新作其人
 に傳はつて居りまして、眞に此の親にして此の子ありと謂ふべき
 人物です

末松先生は我輩の話を意外なりと考へられたる如く之に付て問ひを
 起された

末松「それほどの人物ならば、今日迄にモット世間にも知れて居る
 筈だが、トント聲名が無いではないか
 我輩其の虚名を賣らない所が江藤のエライ所です、彼れの志はソ
 ンな小な者では有りません、彼れは一身の功名などを念として居

ない男で、専ら天下の形勢に注意し、他日大に爲す所あらんと修
 養して居るので、経綸も有り學問も有り、第一人格が堅實で、
 眞に國家を托するに足る人物ですから、御覽なさい、今に機會が
 來たら、江藤が大に活動して政界の一大勢力となる時期が來ます
 から.....

我輩は熱心に彼れの將來に囑望する所以を説き、大隈伯爵の後継者
 は犬養毅君に非ず、大石正己君に非ず、實に江藤新作其人なること
 を指摘し、彼れにして進んで一黨の首領たるの時、其の公明正大な
 る人格の光明は、天下の人心を吸引すること恐らくは大隈伯爵以上
 ならんと言つたが、悲しむ可し、彼れが其の志の一半だも行はずし
 て永眠したる今日に於ては、我輩の此の言を證據立てることは永久
 に出來なくなつた、然かしながら我輩は今以て江藤の人格の卓絶し

たことを思ひ、彼れの死は我が帝國の一大損失なりしことを宣言して憚らない者で有る

三島彌太郎君

末松先生は我輩の江藤觀を聴き了りたる後、然らば貴族院の一俊才とは誰れぞと問はれた、我輩は之に對して子爵三島彌太郎君を指摘した

我輩「三島君とは個人的に知りませんが、曾て貴族院に於ける彼れの演説を聴いて以來、常に注目して居ります、如何にも頭腦の明晰なる人で將來の大藏大臣として一國の財政を托すべき人物と思ひます

末松「三島は知て居るが、君が感服したと云ふのは貴族院でドンな

演説をしたのか

我輩「兎ても先生などにはお氣が附かなかつたと思ひます、勿論問題が至て平凡でしたから世間からは何とも言はれなかつたのですが、我輩は之を聞いて殆んど理想的の雄辯と思ひました

末松「ハテナ、何の問題で有つたかね

我輩「イヤそれは詰らない問題で有りました、北海道拓殖銀行法中改正法律案と云ふので、高が一銀行法の改正ですから誰れも餘り注意を致しませんでしたが、我輩は之を聞いて、ドウモ其の理論の透徹せる、其の數字を操つることの明快なる、辯説の流暢にして言葉に力の有る、實に驚くべき雄辯で、少くも島田三郎、尾崎行雄、井上角五郎諸君以上の雄辯で有りました、貴族院の若殿原の間に此の如き雄辯家を發見しようとは全く意外でした、若し此の

雄辯を以て大藏大臣として演壇に立つたならば必ずグラドストーン以上の大演説が出来ましよう、又若し政府の反對に立つたならば一演説を以て能く内閣を打ち倒ほし得らるべしと考へました、其の舌には一種の魔力が有りましたが、此の舌よりも此の雄辯を出したる其の緻密なる頭腦に敬服しまして、爾來我輩は三島君に注意致して居ります

末松先生は其の極めて鷹揚なる態度で、我輩の説明を聴かれたばかりで、格別同意はせられなかつたが、爾來我輩の此の質言は着々事實となつて現はれて來た、彼れ三島君の貴族院に於ける勢力は、年々を逐ふて増加して來た、彼れの數理に明かにして、頭腦の明晰なるは既に世の認むる所となつた、恐らくは彼れが大藏大臣として國家の財政を料理するの日も決して遠き未來では有るまい

「不如歸」の主人公

●德富蘆花君が小説「不如歸」を著はした時、其の主人公浪子の情人は、三島君で有ると云ふ噂を聞いて以來、子爵三島彌太郎君の名には無限の興味を感じて居たが、實際其の人の風采を見ると小説の中に有る様な、ソンな好男子ではなかつた、甚だ失禮なる言草だが東京座の芝居で見た中村芝翫の浪子に配したる市川高麗藏の彼れとは、似ても似つかぬ薩摩隼人の頑丈作り、一代の痾癩男三島通庸君の令息たるに耻ぢざる風采で有るが、然かしながら其の明快なる雄辯と其の緻密なる頭腦とは、誠に佳人浪子の心身を傾注せしむるの價ある人物である、我輩は今や香港峯上、翠滴らんとする綠樹の下に、末松青萍先生の前に質したる二個の人物中、其の一は既に之を亡ふた

るを悲しみ、残る一人三島君の將來に向て、改めて國民の注意を促し、果して我輩の豫言の中るや否やを卜せんと思ふ者で有る、



第二十 端方君の嚴命

明治四十二年の夏、漢口から揚子江を下て九江に立ち寄り、南京に往つたが、時の兩江總督は名望隆々たる端方氏で有つた。王安石の遺蹟たる半山亭は、我輩の號名と因縁淺からざれば必ず一遊を試みざる可らずと、明の孝陵を見たる歸途、之れに立ち寄て旅宿へ歸て見ると、總督からの案内狀が來て居た、其の翌日午餐の招待で有る。

西洋風の建築

午前十一時半頃時の南京日本領事井原眞澄氏と共に總督官邸へ出かけた、馬車が門を入ると清國式に鐵砲が鳴る、井原氏の馬車と我

輩の馬車で二發鳴つた、玄關には洋務局總辦溫秉忠、同參議會暨及
び總督の幕僚鄭汝駉の三氏が出迎へたが、三氏共に英語に通じ、巧
みなる交際振りである、此の館は外賓を迎へる處で、スツカリ西洋
式に裝飾されて居たが、應接室に入て三氏を相手に話をして居ると、
ヌーとした青年が軍服で這入て來た

青年「アナタ石川さんですか、ワタシかう云ふ者です

日本語で話しかけながら名刺を出す、見ると兩江教練處提調萬德尊
と云ふ人だ、彼れは曾て日本に留學して居たので、日本語は出来る
が軍人だけにブツキラポイで話に味ひがない、努めて取り持つ積り
で何か話しかけるけれどトント面白い話が出来なかつた

交際家の端方氏

かゝる所へ總督端方氏は出て來た、如才の無い應接振りで、交際家
らしい態度だ

端方「自分も貴國の青山博士の診察を受けてから大に健康が回復し
ました

言はれて見ると、成程大分顔色が良くて、精神も爽快らしく見える
端方「原口博士は北京で何をして居りますか、早く此の南京へ來て
貰ひたいと思ひます、色々相談する事が有りますから

彼れは南京から上海に通ぜる滬寧鐵道及び南京の市内鐵道其他管内
の鐵道事務に關して、大に原口君の教を請はんとして居たので、我
輩は此地へ來るや逸早く原口君の意を通じて置いたので有る

主客總べて十人

此日午餐に列したる者は主客十人で有つた、客は我輩と英國少佐メ
ンジイ氏で有つた、それから井原領事、温總辨、曾參議、萬提調、
鄭幕僚の外趙氏程氏と云ふ兩老人で有つた、メンジイ少佐は暫らく
袁世凱氏の子供の教師で有つたが、袁氏没落の後上海の警察署長に
任ぜられ、此の時は新任の挨拶かたぐい總督に敬意を表する爲めに
南京へ来て居たので有る

食事中燕飛び込む

總督を中心として清國式の圓卓を圍み、種々の談話を試みつゝ南方
料理を取居る内、一羽の燕がヒラヒラと舞ひ込んで來た、之を見
ると六十七歳の程老人は白髯を掀して曰く
程「昔から燕が舞ひ込むのは吉兆として有る、之れは何か總督に福

運の來る瑞兆に相違ない、賀すべし、
そこで一同酒盃を舉げて賀意を表すると、總督も欣然として之を受
けた

強賊捕縛の報

宴將に酣なるの時、官邸の一官吏は入り來り

一官吏「申し上げます

端方「何事か

一官吏「かねて御管下を荒らしましたる強賊が就縛致しました
之を聞くや否や總督は片頬を笑み

端方「果して良い報知が有つた

總督が先づ快然として笑ふにつれて、一同は燕の前兆が早くも事實

となれりとして、笑ひつゝ再び酒杯を舉げて之を祝ふた

峻烈なる命令

強賊就縛の報を聞いて喜びたる總督は、振り返りて官吏に向ひ

端方「其の強賊は十分に注意して監禁致すやうに

一官吏「ハツ畏まりました

總督は言葉に力を入れ

總督「若しも……………」

一官吏「ハイ

總督「之を取り逃がす様な事が有つたならば……………」

總督の眼光は異様の光を放ち、其の言に一層の力を凝めたので、憐れむべき一小官吏は其の威光に打たれて、頭を低下しつゝ

一官吏「ハイ

總督「司獄官は勿論之に關係せる各官は總べて……………」

一官吏「ハイ、ハイ

總督「彼の強賊と同じ刑罰に處するから……………」

一官吏「アノ強賊と同じ刑罰？」

總督「サウだ、取り逃したならば司獄官も警察官も強賊と同じ刑罰に處するから其の心得を以て、十分に注意致す様各官へ通ぜよ

官吏「ハツ畏りました

一官吏は殆んど震慄せんばかりに驚いて室を去つた、萬一此の強賊を取り逃がしたならば、關係者一同強賊と同じく、首が飛ぶのだから、これは驚かざるを得なかつたらう

メンジール少佐の我輩

總督はかく嚴命を下したる後

端方如何にメンジール少佐、自分の此の嚴命は如何に思はるゝや

如才のない少佐は聲に應じて答へた

メンジール誠に良い御命令で、コレでは當局官吏も決して取り逃が

さないで御座いませう

總督は之を聞いて首肯しながら更らに我輩に問ふた

總督「石川君は之を如何に思はるゝや

我輩我等日本人の思ひも寄らざる御命令で有ります

かゝる場合に我輩は此れ以上の答へをなすことは出来なかつた、我輩が日本人などは思ひも寄らぬ御命令と言つたことを、總督は多分

非常に褒めた言葉と思ふたで有らうが、我輩共はコンナ事は全く思

ひも寄らざる事であつたのだ

強盗殺人の大賊ならば、言ふ迄もなく彼れの首は飛ぶ者に相違ない、

然るに之を取り逃がしたらは關係の警吏獄卒の首が飛ぶとは、随分

激烈なる制裁で有る、勿論實際賄賂に依て死刑囚でも逃がすと云ふ

清國の警吏や獄卒に對しては此位の制裁を下さなくては其の嚴命が

行はれないと云ふ事情は有るかも知れぬが、何れにしても現代の我

等日本人が思ひも寄らぬ命令で有ることは事實で有る、我輩は今尚

端方氏が「大得意で此の嚴命を如何に思ふ」と問ふたる時の面貌を回想

する毎に覺えず一笑せざるを得ない、

鳥飛兔走錄終

大正元年十一月十八日印刷

大正元年十一月廿一日發行

(定價金五拾五錢)

著作者

東京府豊多摩郡澁谷村百拾七番地
石川 安治 郎

發行者

東京市小石川區櫻木町六番地
葛岡 龍吉

印刷人

東京市小石川區新諏訪町二番地
片岡 武一

印刷所

東京市小石川區新諏訪町二番地
明治製版印刷合資會社



發行所

東京市小石川區
櫻木町六番地

北文館

電話番町三五八一番
振替東京一四四八四番

早稻田大學教授 文士 內ヶ崎作三郎著

(裝釘優美挿畫七葉 四六版四百十餘頁)

英國より祖國へ

定價 金壹圓
郵税 金八錢

大坂毎日新聞の評に曰く著者が在英三年間の觀察談なり
牛津大學在學中の學窓回顧録なり英國精神界の消息に就
いて其近況を詳に物語れるが凡庸の旅行記にことかはり
て珍らしく且有益なり我國の思想界は著者の觀察と研究
とによりて新しき教示を受くると少なしとせざるべし特
に英國特有の學院生活の狀況を雄健なる筆致を以て鮮明
に描き出せる所は讀者に強き印象を與ふ

北文館發兌

早稻田大學講師 安部磯雄著

婦人の理想

菊版箱入
裝釘美麗
定價金壹圓貳拾錢
郵税金八錢

婦人としての職務を偏重し人間としての發達に多く意を
用ゐざる女子教育は根本的に誤れり男子と婦人は便宜上
職務を異にすることあれども其體力智力徳力を發揮せし
むるに當り其機會及び權利に於て何等相違のあるべき筈
なし故に婦人の理想は出來得るだけ男子と並行して諸能
力を開發せしむるにあらざるべからず今や婦人に對する
著者の熱烈なる同情は凝つて本書をなす

北文館發兌

日本女子大學校教授 松浦政泰著

奮闘の偉人

菊版參百拾餘頁
肖像挿畫拾葉
定價金九拾錢
郵税金八錢

大阪毎日新聞の批評に曰く本書は我國を始め英、米、獨、佛、西、澳、以、噠八ヶ國に於ける實業家、政治家、軍人、科學者、文學者、發明家、探檢家、說教家中の古今の名士三十名を選び其逆境に處する苦戰奮闘の徑路を記述して現代青年修養の資に供したる者行文平易流麗宛も新講談を讀むの觀ありて興味と教訓とを併せ享受するを得べき近頃有益なる讀物なり

北文館發兌

海老名彈正著

國民道德と基督教

菊版上製參百餘頁
定價金壹圓拾錢
送料金拾錢

大日本帝國德教の大本正に改定の機熟し世論囂々の時に際し先生茲に世界人類の大勢に鑑み基督教によれる新忠孝道德を主張せらる此書則ち先生最近の思想を輯録したる者。前編に於て國民道德の活問題を提唱し後編に於て基督教の人格養成の眞諦を闡明したり。教學界の士は勿論凡そ經世に志あるものゝ看過すべからざる良書なり

北文館發兌

332
387

キヤンベル氏著 文學士 今岡信一良氏譯

新 神 學

四六版上製四百五十餘頁
定價金壹圓拾錢
郵 稅 金 拾 錢

附 內ヶ崎作三郎氏評論、並にバーナード、シヤウ及ホール、ケーン兩文豪の宗教演說

本書は自由基督教のリヴィブルとも稱すべき新宗教運動の思想的叙述也。而して其主張は進歩的宗教思想を代表する世界的勢力たるのみならず、其所謂高等汎神論的立脚地は實に東洋宗教との接觸點を暗示せるもの、今や三教會同の舉ありて新に宗教論勃興せるの時、我宗教界は本著の啓發に待つもの尠少に非ざるべし。

北 文 館 發 兌

334
387

KIIV-63

北
文
館

終